

Diary (1950.3.11 →

北大医学部

細野順三

文部省撰定教育ノート大學高専用

“偽うむるの記”

僕は長く間、日記をつけなかつた。

心のゆとりが無かつたのだ。

それと率直に認めやう

だが、今日は友を通じて、人生を考へ  
人生を詠歌して、この青春は実に  
貴重な何ものにも替え難い金剛石  
である。古川事と身にしきて感じた

そして深く反省と共に、あの感激的

白銀四年の生活の基礎に立つ。この四年  
(然し実際二年余す三年) 医学生生活三  
年にも況て光彩を放つものがあつた京事  
を知り、深省をふし、中絶してゐた日記  
(その生活の記録)を七月ぶりで記す事にいた  
その名は“偽うむるの記”として。

一九四〇年春月十一日 午后十時三十分

愛す 姥子 さ  
人生の叔父の道を孤抜き達  
又悲しからず。  
雪原の跡辺  
見出しつゝ僕の春待つ草の芽め  
生きる僕の胸日何から  
生うて君の手握るに方つて未だ  
見てゆく僕の眼も涙も一猪に氣水  
何のうやうの光も共も事も

列傳  
之記

一九五〇年十一月

参月十一日(三)

レサジと人生を知つた

其の学が其の詔

語つた友は帰つて行つた  
渠とがりし二の日である

僕は寂しきふい程

首泣きつきた良の友である

白苦しきのた

どうして

若人は苦しむのだ

僕だけが唯一人の娘子を信じてゐる古小事は深い  
反省を要す。唯一人の信じ切る男と云ふものか?

そつとして置きたい。その手に

松井の心中も分る。

俺が愛せらるゝことある事はいけない

事者のだしひきとも彼の心こそ強

俺は今迄謀も愛せなかつた。云々城戸の心も

只一人

微笑み手を柳葉記云平田の心も

結局は首一つぶりだ。寂しきが強、勝目なり。

だけど僕は二つ幸福をそつとして置きたい

床の中で今頃は音がやつてゐと思ひその盛會を

祈るのますよしと昨日言つてゐた不參の勝目のも

金子様、小母様は良の方ふり。僕の気持ちを分つて

戴けの方ふり。僕うは甘えたいのだ。おれでいい

今日の三企て感謝至る夫より多く小母様に感謝する

第一学年終業記念コンパを了えて

三月十二日(日)聖日の朝を迎へ心身共に疲かふり

午前八時半より日曜学校又十時より礼拜その後役員会

三時よりさゆり会と遂終日を教會に過す

S.S.は最終講義マルコ伝十大章に入り復活イエスを訓える

中善科一年共に学び共に睦々し彼らの授業にて終る。  
良い生徒であった。このまゝ生長して良き信仰の果て結んで欲し、  
午后のさゆり会の今後の在り方に就き、座談会は之又活潑あり  
意見百出し。結局現在のさゆり会は三月を以て解散とするとして  
四月より新らしい会を創立します。全て白紙還元として、中善科  
出題、高善科、女学生を中心とした集会に発展せしも事に意見  
の一一致を見た。本日の出席り会より意見溝溝で良し

三月余り期間準備期間とし、月居、細野両教師と相談役として  
創立の胎動入る事にす。本日役員会(午前十二時—三時)

「SSS 計報」(故会議に報告るもの)を提出する。

アルバイトの結果(アリ)

良き聖日を古んが

然り良き哉!!

余す一週間にして本学年も最後となり。

アイトを出して頑張るべし。

三月十四日(火) 雪・無・東京で良き休養を攝る人

おれだけでも憂鬱なふう 医學部だけノコノ通字とは全くの外

文句なし面白くない

昨日も今日も只顔を出してやる。過かず、

所は、青年会例会は例の如し 可哀想であるが

則

委員会の不理解等の如き方から、失張り一つの会の上に会

①

は從ふべからり 会則も知らぶりであのやう一二三事以上当然と思つ

るを追究して終会と流会にしておいた。

又、後のアガベとエロス

の討論にしても更にくじらか、 琴似教會青年会、知性。俗

ニ暴露してや、 新利害接生と云々、 女子会員と云々、 頭が悪く

其の俺達のやうな者に牛耳られてや。それでだらーかひさすけむ

ス、女は、現実的ぶりに驚いた。ロマンチックの点全くおし

めす。在学生活

又しても、南國の渡鳥の帰郷ぶり

娘子君の便りとれば、鶴川でもココと文うる風邪に感染し、その後

娘子自身も九度發熱、毎日伏床してどうだ、首筋が弱いから大事

ことなどあらう。彼女も相変わらず虚脱状態で、病らぶと見えた。

何の原因は分らぬ事と大シユリーフリ とは 不可解フリ

三月十五日(水) 余す四日迫り 創立トスパート ダッシュタリ

兎玉教授最終講義、脊髓終了。一応感傷あり。彼らへ講義終始したからだ。生理・朴次教授、講義は一番權威あり。

是れに彼の外國仕合の身軽しを敬意を表すに足る。

午後、解剖實習日 金手三日ふと、脅側を一氣に走りすすめる

アイトを出し全肺 Haupts まく 猛烈不臭き。お陰で帰宅して

お湯でいらいすをも喫すが水がすすり手のヒツにしきんだらー、

午名四時から一時間の亘て、浅倉、松井、若瀬の三人の大里政談の中

天一坊、紀国屋文左衛門仕事中、振袖火事、くだりの一座を話す

三人とも感心する南家の江戸時代・人情嘶々仲々捨て難いもの

三月十八日(土) 僕と古ふ人間が一つの強・口性を持つ人間で

事と云ふ事が分つた。先日の木曜日の三好林師との懇談会

の席上で発した僕の言葉は確かにそれであつた。

と古ふ人久々津姉が今日、あの時私は確かに細野元に付して憤り

を覺えました。然る家帰ると反省して付し細野元にさつて

事が正して、私の找出の問題は確かに愚らしく問題ぢぢと京

事に気がつきまして、さと細野元は思ふ事で、辛直に隠し隠しもせず

ホン(ホン)人で、その代り、陰では言ひかゝ人。お腹の中には何を

かう人であると京事が命り、私の今迄知る人の中には珍らー、性格の

人を、京事が命り、その代り、二水も僕の江戸の子供の

性格かも知れなく、轉骨(ツバキ)ズバリく辛直(ハラカニ)言はなく

氣がすまない、但しそこには悪意も畢竟もす、人間ふんで

單純なが單純でまづ、永か僕の口性、一つんだ

今度も余す一日で帰るが、今度は、氣温は、風、吹く

ヨコに休養、勉強して来やう、夙來坊を自覺して、是れは

徹夜の事の歸る中、目的として差支えます。

三月十九日(日) 何もかも忘れて帰つて吳<sup>ル</sup> 月居の言葉だ

有難い九死一生だ 致<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>致<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup> 何もかも忘れて二、疲倦

果てて身体<sup>レ</sup>引提<sup>レ</sup>して帰らる<sup>ル</sup> 有國の君侍<sup>レ</sup>松郷へ!!

逃避行<sup>レ</sup>でもない 僞<sup>レ</sup>ミ<sup>レ</sup> 忘れ事<sup>レ</sup>が必要<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>のだ!!

何をかも忘れて S.S.の事 教会の事 何もかも忘れる

俺は疲労<sup>レ</sup>してやう 精神的にも肉体的にも身<sup>レ</sup>の極<sup>レ</sup>だ

達<sup>レ</sup>してやう 何もかも忘れて そつとして ニリモフ<sup>ル</sup>帰らる<sup>ル</sup>

故郷の人口の温<sup>ル</sup>胸<sup>レ</sup>抱<sup>レ</sup>水<sup>ル</sup> 故郷の山々の美人<sup>レ</sup>、春<sup>ル</sup>の

當官<sup>レ</sup>の中<sup>レ</sup>休人<sup>レ</sup>で來<sup>ル</sup>やう 何をかも忘れて!!

向<sup>レ</sup>もかも忘れて!! 一二言葉<sup>ル</sup> 札幌<sup>ル</sup>琴<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>よ

春<sup>ル</sup>迎<sup>レ</sup>へて呉<sup>ル</sup>水<sup>ル</sup>へ 懐<sup>ル</sup> 一二 人達<sup>ル</sup>カリ<sup>ル</sup>

首<sup>ル</sup> 一二 人達<sup>ル</sup> 美<sup>ル</sup> 一二 教会<sup>ル</sup>

（ ） 齧<sup>ル</sup>を喰<sup>ル</sup>かレム<sup>ル</sup> 春<sup>ル</sup>待<sup>ル</sup> 呉<sup>ル</sup>水<sup>ル</sup>へ

（ ） 何をかも忘れて!! 足音<sup>ル</sup>直<sup>ル</sup>そば<sup>ル</sup>聞<sup>ル</sup>えてゆ<sup>ル</sup>でね<sup>ル</sup>から<sup>ル</sup>

俺<sup>ル</sup>帰<sup>ル</sup> 黙<sup>ル</sup> 黙<sup>ル</sup> 何をかも忘れて!!

故郷<sup>ル</sup>君<sup>ル</sup> 黙<sup>ル</sup> 黙<sup>ル</sup> 何をかも忘れて!!

（ ） 何をかも忘れて!! 足音<sup>ル</sup>直<sup>ル</sup>そば<sup>ル</sup>聞<sup>ル</sup>えてゆ<sup>ル</sup>でね<sup>ル</sup>から<sup>ル</sup>

（ ） 何をかも忘れて!! 何をかも忘れて!!

三

上野一善  
生の日月  
振鑿之流  
酒の病  
三十日暮日  
の金水  
暮冬三月  
天祖代々  
宴服之御  
茶水  
鶴川二十三

一 懈一人の「國」の、眞省生活は豈ひ多少年穏か乎。年心の疾苦の  
事は、遠くに及ばず。此次二、三日、平和は異つて世界が物を云ふ。

私院の爲めに、甚だ生活が苦しく、非社會的で天下の生活を厭う。自己の爲めに、未だまことに、嘗て、何十のやうな社會・現象に遭遇したことはない。

城子曰：「天下事有之，而聖人無之。」人不許有是，答非所問也。  
輕重不無度也。」「一時、廢揚下  
三二、諧不來知主、未端者」と云一問題、空其有  
矣。大言、美辭（顯揚者）。体強、高、消極也。」「不無度、決名主事、  
生人而止。」無知之空也。思慮之空也。案外、思慮之淺、義之粗也。入之。  
三人至而聽之。不許至理也。持子制斷、多有子。皆之二人曰：「量劍、」思慮  
之。一、失輩。不期也。財主得之。初不努力。決主害。因力也。成傷。多  
終。終不盡量而之。開拓之行之。深一也。

僕の想ひで字筆は東洋の國子の一志の精神の、社會に出て来た。是れ是れ  
之をつた僕は才氣と考究方や人生の歩みの、一生の考究方や才氣と才氣と  
の医學書の讀物、當時特殊環境の、僕の義理と相違無から来る相違  
理解。不全の才氣と不完全の才氣、何う僕は字筆はしむりつてゐて  
俗に古文の世間知らず、一種の藝術才氣の、私語玄文式の甘い音文方ふらぬ未  
だ山頭の子の如く僕は才氣と知能焉。

一九五〇年九月十二日(火)

田舎へ直々暫く途絶えていたベンを取る事に一矢

六月の朝鮮動乱を契機とし、又しても韓国が戦争と云ふ現実  
が我々を包みはじめてゐる。そして七八月とソビエトの背景する  
北鮮軍とアメリカ为主体とする南鮮軍及國連軍が血をまぐさない命  
の争鬭を繰返してゐる。そして國連と云ふ名目の元に日本は保全と  
約束され、自衛と云ふ名目。元に鉄砲を持つて警察官等を備  
隊立むものが暮集され訓練され、國連の協力が日本、現実の  
課題である。同潮が若んど支配してゐる。然し僕は若人の日本  
人が無神経無厭食でより同潮に流されて思ひ方い  
生きてゐる。現実の今日から命の糧を得る為に宿命の中に身を  
置かざるを得ない。生きるためには人殺しの武器を取らざるを  
のがれ。二、三の邊に現代の懷疑があると思ふ。

無神経で只飯を食ひ人間が滅ぼーーインテリの弱さ時代  
に於てもインテリの弱さ劇は二考へて飯を食ひ三考へる。

実際の肉鶏と昨日から日本は何處へやしか。前の中止生  
水三思敵一と考えずは居る。

昨日も授業開始、診断学及外科に入りました。実習  
と併せて八時半より一時まで全くの通一講、講と云う。又しても医学  
上、死の進行である。第一回學士試験は大一生理と除そ若人と  
合格、見合ひである。この秋は坐かなくて読書の運動は頗強らう  
娘子は階段二段階に亘り書を秉て、う夏休み約束は毛とヘ  
タリ也落葉形で果をもつとも愛する事の表現である事につまんで  
居る。娘子が不安なら、清水はリーベル共通、もろかそ何うとは呪うね  
僕の幸福である。娘子の愛を信じてゐるだけだ。

九月十六日(水)

静かな夜秋である。暮春日に早し秋の日もとつぶり落つて余りに  
静か。秋の宵である。久方ぶりに感傷的になる  
人生五十年半にして今前途に果て不思希望通り難む

過りの三余年を顧みる時もさう寂漠、感傷よりも非ず。

故郷を離れ、男児志を立て、奥郷に学ぶ者

にして胸を打つ

この感情や又大なるべし。過

五年前、最愛の母の元より

课業の人生意氣に威い、決然遊学立志の道を擇ひし日。

胸に去来せる感觸に思ひ馳まふ。医学の久道書に半ばて

終え遊学の志を成す日は余す二年半あり

意』『理想』『光

エルム学舎の門を出でて一方、朝云暮雨、吉未とも

少年の意志を抱り、訓練を因る時、『不甲斐無く

理実の自己に染みて事は幾度であつたか

噫』今にして

そり涙をこぼす自己こそ寂寥なり。

本日 戸部晴子婦の

出京を闻いて藝術の退進、前途の内途の思ふ得入

十面八方、若き乙せり、御用の前途、遊学の決意を知りて、そぞろ

反省する處の大半は、豈威儀のみならんや。昔くは妹よ君の

持てる藝術への探求心と發揮と輝く才能を獲得せざる

若き君の健康と精神を祈り止むね。

エーネ台風被害者の義捐金夏祭り本日午後行屋大成功、中

終了す。善意の人々の感謝す。

十月二十五日(水) 一日以来の寒波日遂に全道的に降雪を齎して、例年

より旬日早くオホーの襟を立て、登校する、種々と云々秋はヨリ

生活であるが、やがて来るXmas迄暫く休息を得る必要がある。

スノーボード読書、勉学は一念満足らず、秋を送り得た事の感謝

す。遊学の身の美々に心と慰め、之ほど下さる人々たちに盡きぬ

感謝を捧げる。昨日も河崎さんで消耗したうつでもうつしやい

と小母様、優しい言葉を戴うが、奥郷の空で隣人の愛の觸り

た時程娘の事は無い、あつこーー、仰馳走る目に一針の神

嘆き立學の大志と北國エルムの学園に開きである

まさに篠人、人が僕、胸中を去来しそう、皆良の人達ばかりである

おうの、篠人か曰く疎き縁の人、予とよもよつた、命者也離

「悲哀とは云え、人間順三の生きてる限りの人々、段々かりて、老れた

あたかい心は忘れて、思ひ札幌へ来てからも、家人、人々が斯うして思ふ事の  
人の中へ加えていつた事だらう。十九オーヴ二十六才八年間、札幌での青春

は誰よりも恵まれた金字塔で打建てたと云へやう。

美しい緑の街札幌、そこに深層ガラスの眞理研究所の八年内は

廿二、故郷札幌の恩を出と共に、永遠の達成を祝つゝあがれと並んで  
僕のこれから人生を謳歌する事であらう。そこで来り去つて行く

衆人より、この街の人々の幸福を祈り贈つてゐらう。

又してもストーブが燃え、暖を候ゑる。嚴肅季冬。健美の一歩々々  
の街を包み来つて、燃え立石過ぎて六月十九日、短い間、櫻宴、  
幕開け人日々舞の天衣有も、春へ次、御簾幕、準備に入る。

雪は降りつま、そく寒きはきびしくも

而して春日未つま、——(内村先生の言葉)——

けに人生の嚴肅は、うう、街の人々が味ふべきもの

十二月三十日帰省して以来、二月一日出京迄約一ヶ月間  
二度の渡省で完全に回復し再び札幌へ来てから、人間順三の  
故郷の暖く人との対面感謝する。特に、前も増  
特別愛する娘子の細やかな愛情日々、林  
とアイトで呼ぶ起と呉水を、例へ一時ぶりとも  
只金の音響が心の懐り切れる時があると古い  
は僕の最大の生き残りと貢えまだ!!  
愛情は一つ思議なものだ。男との最大の結合がつ  
かこのもののゆめり、信り切れるのは人間  
して不甲斐無いもどり。又興奮じもある

五年一月

終戦大年日、運次々運送する命令の傳印

夏風と新春日

訪水石色めぐら

モリヤウ生産を了被令覽

上島

内入特使、訪日。雨季備、蘭和向經、萬島上島  
等の現実の日本の政情、再軍備反対之意人今ノ機  
会、全面講和之節へ再軍備反対之意人今ノ機  
会。現実の情況は、トルコ大統領の行なう世界  
の自由國家群日今、共産主義の怖威、之を承る  
之に對抗する此番日、國結立上に該同し、反失  
の機械の元、自衛國家像を画くんとある。

警察予備隊のり、單独講和のり!!

日本、物価化のり、そぞ不景氣持便一行の訪日は

國會の開会式、一九五一年ナレーベルト奉天にて了。

果して「空の自由主義」と云ふのがあるか?!

二月七日(水)

登校日目

雪の中、火災多至

昨日より東京空港にて之日又裏道古河市立第一中学校にて

昨夜、東京にて、取扱店舗にて、之日第一中学校にて

今年経口薬一包、物價は高き、婦女病院にて

交通機関の混雑、相当冷寒、降雪、未て有

内科・病理学、新設リテラ、滑り傳音もすや

六月中日一通り、二月日中島、一、被災者表

予定せず。二月日、三日帰省(通財上、事務)

千種港、及、マツヤコ、アシタロウ、井林、淺倉と私

日本純粹、札幌人口より消息有る事無

安念、ミソヒ、捨て、札幌より一度の外出にて返程

而日、一月日、一月日、一月日

ストーブの停電、暖房費の支拂や!、外口吹雪が有り

之時、之を、暖房の

珍しく、

二月十一日(月)也

聖日

昨日は衛生を休んで植シ子でスケイティンクしたる祭り  
で今朝は足首が痛い、九時過ぎ日曜参後以  
出校可。引続ミ礼拜。自衛の出席可。

午前は中等科礼拜及分级。便従行依十五章  
のエルサレム會議の報告話す。世界伝道の才の  
隆盛をうめりし「割礼の肉野々歎き」ハウロ対  
バルバーラ論争。始り。エルサレムは「アロヤコブ」  
の見解。又キリスト教とアラブ教の争いの歴史を解説す  
る。次にアラブの争奪の経過を語る。

前半。北一修約会後蘇魯書記を聞く。庄経全  
を行ふ。東枝側・池田教頭・高橋・月居・尾平・安井  
上田・木村各教師・助教師・教務主任等  
小室加三。四時三分解散。余良只観舞  
夜日 楠木一郎 梅千 道子 十一時迄 三時泊行にて  
結局僕が四千二百点満得。最高の追込せん奉功  
三位 晴子元三位 喜野兒 四位 加藤セイタの順  
来しの晴れ夜を過す。又良只観舞や!!

二月十二日(火)

衛生・細菌学を了し退校す

早速三千上り。内也。周芳賀製スキード級品を擔ぐ  
寺口山ゲレンデに向ひ。先ずニセツ行のトヒニニアと古マヌ  
は立心地仲よし。一氣に寺口山から裏山へ換て下りる  
途中吹き溜りにスキードして一回転倒す  
四時 療養所に至り 小森と歌ふ。又食ふ。  
豚汁及豚肉の味賞上乘。彼考え方の変化  
は大張り。據篤だと思ふ。この七面倒臭い社会は  
孤高を守るには困難だ。リーベンしても然り。メーリン  
最善善くおも。改善で限り。不可能。

人生昂揚アリ。リーパーも仰ぎ、氣鉢水のリーパーふらん  
お互様に此の行アリに徹ニ切開ル事いから嘔八百石並べ  
たる。プラトナック、コマニチックラテー量を言及するが。  
彼は、「お前は苦労をかい、お坊ちゃんが、美一、よ」と  
言つたが、氣も含む。彼が君王肉体を餌は見てハツド  
に考スケル加何ちルスルとは云はなかが、直氣狂リシンドル  
考スルてエゴイズムに引飛だら、幸福だ。彼は年当91  
と言ふが、古温さういふ。只俺の例、よそハイド化の出現  
頻度が、ヨリ、出でば、ホット灯玉四千の火を長く保ヒセ  
オラヒトモ留置する。所詮動秒の差で、元々周波が未  
3セイは知スルが、保ヒセ耐性は差まじけ無  
然レニ、ニク所ヒミツ、今日も空、今か喧嘩だ、妻、買ひ物も勿  
けちうれ先に居尾を出立す。竟地張りの競走だ。  
ニク娘は何か知り蟹アリが良、運動を毎日やヒ  
体の調子が良い、朝飯が美味しい、黙多モモリく  
アイトが出て来る。何か勧めふと、さづぱリレキ、  
雪が降つても、風が吹いても、アイトは消耗しません。  
只、学徒の勤勉強め余り氣に乘らざり玉にキズだ。  
夜は七時夕食後、虎造の石松三十石舟をきく。又ホーカー  
十時半迄、今夜もつまう。四十点浮ツエンド。  
中林屋の牛乳娘子で、娘子のお手並拜見す。少しお湯  
が熱かつたが惜しい。お茶もさうが娘子は二月の誕生日  
を過ぎて遅一ヶ月である。健康を祈る。  
僅少荷物、三気食アートに充ちておも。娘子の嫁博  
が、重太郎アターレギュラードを信ひゆ。併せ中の中レ  
ハリし思ひ出ス。クースアッテして来る。  
僅の幸福が、心安レテ想、永遠アリ一よ。(二人語。柔らか  
良の如きか?) 幸あれ。

二月十三日(火)

朝5時45分バスにて登校する。婦人科・薬

理二時間で二時迄講義、清水も南下る。薄空新世界

松屋にて川原・井林・鶴見・松井等と落合小・シャンソン集

ナルスダン等聞くがどうもシャンソンは餘人が時どきひつたりして、

丸の長靴とて喫茶店に納入する。自体があがしいのだ。

21-10不味い。M-T-Bにまないものが混こゆるだらう。矢端リ

新宿りきか。ポンは良かつた。どうもニラーベ街口出でと思ひ出で

易癪と云ふ一々見る。中袖や。最後の日も不二や。美前には

娘子が坐そなやうの氣がす。今度何してや……。

着水す。傷水る盛装。と龍よ。一応見水る映画より。

京女子好湯故日アリ祇園花妓り一面を抱んでゐる。

雪中と最終バスにて帰る。マニキリカラの冬生活の一員と

おねば駆け入り、冬の北の生活は單調だ。とくと背中

を丸めて家路へ急ぐ人の群を見るとつづく。さう感ずる

昨日、今はと一降り雪がつい加減にて水あつと休む人曰

が可哀そうだ。

二月十四日(水) 晴れ。雪を朝から吹き落す。太陽が映

る。まぶい位だ。内科各論・病理・細菌と四時迄講義あり

四時更衣室で帰宅入浴。スルビストードの側で読書又良哉

東京口大が暖かに石古車である。

二月十五日(木) 郡道は強風は東京口昨日未強吹雪は

龍巣氷河積雪三種に及ぶとか。防雪設備のよい都民ら

は帳てふためり見てであらう。運転は札幌より快哉めで

平安を行ふ。都民大。万の交通移闇がストップした

のからさきかし賑わひであらうと想像してゐる。

廢校多世界は生徒千名は易一つひまる。が、冬限の  
江戸を除れ程叶わぬか一人、二、況て田舎の生徒方  
が一方的以些此は何んな時日 横井に至る。

相模太郎雅之如レヒ時の大陸平直口と且銳智の  
程を體するが、男性的の魅力は野性と理性と兼ね備え  
ては居る。(勿論女性が全部とは言ひ切れぬが)

カリカリ一筋の威儀の世界は生々たるが、氣を補うるのと  
多量の財産に男性的を重んずる所以である。

威儀と表される男性は往々平凡の人とされ易く、古より  
平凡に生まる。難しきと云ふ人が多くては二の事と裏書き  
してあると思ふ。信仰が或程度威儀の隨伴となり得る方々  
戦争は威儀と以てされざりし。また二つの世界の対立は  
威儀と以てはされず、ソラ。現実。冷えが控えてゐる。

されば世界平和を祈願と二十四時間祈祷しても所詮  
平和への心が少くもよき程度のものでしかあり得ぶのだろう。

二月十八日(日)前週後半日全く空手ースポーツに過ごす

午前中スケート。午後スキーで、三ヶ消耗の感あり。

朝中、藤呂三人で吉田山より鎌倉と沿そ大倉山附近を  
行つて一日愉快である。山スキーへの興味は百倍しな

今日午前八時半よりS.S第一部礼拜に出席可会つとも  
小学校五年級の分級も担当する。其後も礼拜。午名

日本中等科礼拜説教「信仰友情」は就き内村鑑三

のベル尼の書幹「神」を結ぶべし。友情の眞美につき  
語る。

その後二、三年の分級。使徒行伝十大章  
會語も専ら熱心に入る。じつと耳を傾けてゐ  
る心。少女らの瞳をさうめると、自己の信仰。不甲斐  
なく自身を持つてゐる想ひである。彼も約束人。平素生  
が出来た彼女らの成長が信仰と伴に健て伸びゆく  
を希望する。美しい信仰・強い信仰。

は彼女らを必ず美しい精神の育みをめざす。  
夜は早くから泡湯!!

昨日から学業に備へく。

二月二十一日(水) 三十七度と云ふ高温に街の雪も融けて  
道行く人の足と手古帽うせや。 午後から例によくスキー  
にゆく 寺口山裏山二十五度で直滑降する。 潤雪(ニコニデイション)  
上乗雪ど水ど志氣旺盛なり。 暫途療養所へ寄つて

小本と歌うる  
彼来月上旬退院予定

彼の胸中寂寥す所余りあり。けだし草日小雨林の話である  
「一件は傑作なり。即ち、療養所。」  
「メシ金アリニケガ  
いつも、シテ一やる二人の方の中、一人は貴婦アリ、又友達でクリスチヤン  
うい、お医者さんは見えヨリが（醉墨アリ事モ評レバ）。もう一人  
の北ヨリ人ハ、違ふ科の方でシヨラ。（余ク事モナリ）ト言リヌカ  
アリ。  
俺ハ、つも心掛リシム。クリスチヤンなるクリスチヤン  
医者、  
うーく、医者。言動が、實際に客觀視ニルニ事は正ニ  
快適ナリ。“絶対クリスチヤンロ見えフイ”との事。  
まあ、一方の方アリ。  
医者さん口アリの？……”全人、ニの事のためニホーフ、苦勞一ヒもの方  
クリスチヤンの具ナ。

此日娘子より來信あり。彼女一月でスケートを止めさせた事。津田の方へ力を入れて、いよいよ又札幌やまも宣傳と、函町のマダラモリの小説にて力添えの戯れ約束を一通りせり。余外心細い一面玉手子等。一月口余り一端生活し過ぎて故か喫茶店に入らぬ。娘子が生むゆうやう小三九郎と八つとする事ある行幸りとは古へ、ひどい寂さうだ。上人で旅玉一とい。

月二十一日(土) 昨夕は、河野の叔父に偶然お会い  
が会え、ホーリーで、丁度ハーレルの駄菴にいま、食事後、昌彦兄  
の「アキラ」とて語り、僕とも何とかて語れ好転して、  
落着するやう努力をいたりました。奥郷で親戚の人々今少と  
ふるは、おこしもござ!! 今日の午前、小樽へゆく  
邦子姉の宅を訪ねる。旧文政の、夕食を夫の載  
稔兄のステソ鰯の詰奥味舟。何れにとも北海道の

初歩 従姉が世帯を離れては嫌い、不當に氣難い。奥へ  
落書きを跡向か送水するには家から離れては僕はとても大変  
感謝の言ふ所ない。終席列席せり。

昌彦先生の尊名を胸頭に身に纏ひ候日記す。

二月二十日(日) 礼拜後設奠会。十一日、教会會議開催。九  
時、就任奉祝禮。北星。細川牧師招聘問題。設奠会事  
宜は大体異論なし。やむを得ず、要するに教会の自主性を  
左右する大内野議論をきかう。もう少し熟慮して良しとされ  
らうか。  
午後、中華料理。便径行旅。バクロオ三次修正。了る。  
小百合会の女学生達の平業生送別ミーティング。教師謝  
恩会兼て行はる。そこで可憐な委員達が小々歌と懇親を  
交す。会の形式如何にせよ、その志より立派だ。  
上野河崎先生は桂代子さんバースデイのお招きを受ける  
久美子さんと一緒に喜んでお祝の胸膳と戯れ。種々  
者へ出でる。八時半過ぎ、矢礼する。

皆ええええ、仰性を持て良い仰子さん。仰り下り。

二月二日(金) 慢く一日が経てゆく。すくニ帰学以来  
一ヶ月も過ぎてアツた。講義は今月中に終へねばならぬ。各教授は天々時日超過の熱意。入の方では  
我国細菌学界の大御所中村教授も、本年で停年となり  
、一代の名講義も旬日で終りを告げた。事  
實に学校には学年末の審査会が漂つて来た。例年の「  
乍ら、人知れずその空氣の中の一人でさすと思ふと落書きをい  
やうふ。」のかつて、先持に空氣。娘子より便りあり。来年の  
ハイラーテン。つづれ、大分感動的で文章だ。香子姉  
ゴーリンを知りせて来た。幸い初耳や切ぶり!!  
今日吾木・管玉と又逢小日暮と見子。今度、政應の  
その講会を逃したものだが、今日はどうゆう風の吹き廻りに入らしき

矢張り見知の方も良かつたのか否既に。戦争は古ふ不真之  
不眞小。甲六、安室さりへと赤木とて火炎口あがきをして  
因え死人で行なひ悲劇の二人・結末は余りに惨憺である

一レーニガットで我軍中の東京を空襲されて、ナホイ

ナホは、軍の誰も黙々と出でまくる。然し、制度は直了  
觀客の爆笑日。札幌<sup>2</sup>直接戦争。被害者うけぞる事、  
近づかうと吉原も僕には善意<sup>3</sup>涙水有<sup>4</sup>。

戦争了<sup>5</sup>? 分らぬ? ■■■■■と軍人の兄に角田

喜多<sup>6</sup>先生公。善意日。然し、身の内を不知南北にほ  
抗し難く、身尊<sup>7</sup>犠牲とまで終了する。平野一馬、

若ミニニ<sup>8</sup>連れて最後<sup>9</sup>は何れも涙氣こじまつて

呼流<sup>10</sup>。激烈と今世<sup>11</sup>を見出<sup>12</sup>つつある

僕個人の身の体<sup>13</sup>を考<sup>14</sup>る。第一異場の牧草の陰で  
木下が手に持て詰りつけ未だ召集令狀<sup>15</sup>を手にし  
て、そそき<sup>16</sup>連絡船<sup>17</sup>の輪あり函館山<sup>18</sup>。安<sup>19</sup>あの時  
の母、父の経<sup>20</sup>と入隊後<sup>21</sup>の知性<sup>22</sup>。ふい静默然<sup>23</sup>  
と下士官<sup>24</sup>将校<sup>25</sup>の経<sup>26</sup>。胸<sup>27</sup>つむ涙を未だ  
降<sup>28</sup>軍二年兵<sup>29</sup>の事手<sup>30</sup>立<sup>31</sup>身<sup>32</sup>自信<sup>33</sup>。  
又入院前の白銀生活<sup>34</sup>の快適<sup>35</sup>を思ふ時、人向<sup>36</sup>日肉と  
記形容<sup>37</sup>時代の食<sup>38</sup>経<sup>39</sup>又手<sup>40</sup>手<sup>41</sup>は未<sup>42</sup>ありし日<sup>43</sup>  
痛風<sup>44</sup>。孤<sup>45</sup>涙<sup>46</sup>然<sup>47</sup>生<sup>48</sup>至<sup>49</sup>自信<sup>50</sup>。  
又手<sup>51</sup>に坐<sup>52</sup>と<sup>53</sup>努力<sup>54</sup>して未だ、故<sup>55</sup>高<sup>56</sup>軍隊生活  
も自<sup>57</sup>う財<sup>58</sup>得<sup>59</sup>。ナホ敗<sup>60</sup>の國體<sup>61</sup>豪<sup>62</sup>相<sup>63</sup>も  
度<sup>64</sup>未<sup>65</sup>。かう考<sup>66</sup>と<sup>67</sup>死<sup>68</sup>か<sup>69</sup>多<sup>70</sup>が<sup>71</sup>身<sup>72</sup>の事<sup>73</sup>  
死<sup>74</sup>。ナホ逃<sup>75</sup>不得<sup>76</sup>身<sup>77</sup>。身<sup>78</sup>の嘆<sup>79</sup>と<sup>80</sup>涙<sup>81</sup>の身<sup>82</sup>か  
然<sup>83</sup>。今<sup>84</sup>の身<sup>85</sup>被<sup>86</sup>、身<sup>87</sup>傷<sup>88</sup>多<sup>89</sup>事<sup>90</sup>の弱味<sup>91</sup>  
度<sup>92</sup>未<sup>93</sup>。かう考<sup>94</sup>と<sup>95</sup>死<sup>96</sup>か<sup>97</sup>多<sup>98</sup>が<sup>99</sup>身<sup>100</sup>孤<sup>101</sup>涙<sup>102</sup>

三月五日(一月) 日曜は八時より立時起。あ水やニ水やと教會

周囲の奉仕に了るが、今は日休養とする。午前中は  
2回りと読書。就床し午後日入キーと豫定。寺口山又  
晴天の所でレーテは全く美い、アイスバーンも、ラスト  
甚一回転。骨の附れる所、転倒も又良し。転倒した  
際、陽光に映る白雪の顔を押さげたり。手で雪面  
を撫でたりする。気分爽快なり。

昨日長兄より来信あり。次兄のハイラン問題につりてあり  
事此處は主とは二人を結ぶ羽織の組とし、結婚をする他無し  
吾生は豈かぶりに母母子の夫の努力力をゆき地なし」と  
車子さんと残念な教養の不足。吾々との融会性の問題等とも  
凡て努力と歸属。上はムリ解決するのをうらう。

早速返事。教養、音質質問せば何より泉井市井川君には  
泉井市井川君は立派である。之等の如きが出て来る。  
熟考。育成、導き、磨き。庶民の文化を知り得る  
努力をゆき。實に今日本人が極めて優れてゐる時も  
羊水が消えかねる時も黙そ、育成の福音と勵ますやうの  
心不思議。才人者のため、即ち至れり人の心の情で  
一層身近の問題であります。必ず油禁物であります。

今日は福生の院お見えより来信。お兄さんの神經衰弱  
の令状発症につき。又少く様で居承る内。お正月もお通し  
をうながす。乞う乞う氣味。中止更に音を遣す。心から譲るも  
のがつかない。と考。切なる心境は、どんづらひあるも

苦いので耐えず。身の中玉つて利口も春が来ると喜ぶ

極度精神的衰弱につき筋肉して来て。腰と見てお邊丁  
事は多。感じ易い。氣弱りは傳統的。魂は觸れぬ  
你の氣弱い方。何をかお慰め願ひて上手をうよ。か  
金を取。生きての罪をされしと教へうる日ぶり

三月十七日(土) 昨十六日と以て三月期の授業は終る。

愈々晴れとなり、下り坂なり早朝、自ら車を走らせる。

今週日曜は毎夜の如く、サンバの連続で、消夜は

昨日小樽まで出張後、那子婦、娘、一宿泊可。

松井京出張で不在。

二〇夏の世田谷の連中

も来、遊、食事。その結果子の一宿如何と説明。

二〇夏の実力不足の爲め、現在の國家と京に於ける中には、

皆人の自由の問題がある。

講演の日と二集まる。

毎日、連載本を川口市立書の石川道三の邊の内壁

を文学者等より未解決の事、提出される。

「戦争終後と通じて我々正面に立つる、内壁の中、國家の、社会

の、不平等的、階級的、不平等的、不公平の如きが、現はさう、内壁を

お問題として提出する。(人間の孤独)一人向、

善惡を経験)とお小芦沢豊平の成績は、何、解決法もあり

は、ない。むしろ取扱ひも、逃避である。言葉は、人間の、個人

は、そこには逃げて、安へて居るが、社會全体の内壁

とは、何うの具体法の解決法でもない。むしろ、個人の解決法

は、得られないが、作者の結論は、そしまるようだ。しかし、個人

解決法、安心出来るものならば、地にこりでも方法は有るであつ

と述べ、あの力説は、以上の希望に打ちを結論を本、傳ふかせ、理由

とは、元には、清水はアレナリ、十四時、梅の口三三九に移る。第4回の

と題す。第一回から、清水の出来がかかる。研究の日は月の、絶望に近づいて

いる。第一回から、清水の研究の中に吃る。希望を押してやうとする。

清水はアレナリ、十四時、梅の口三三九に移る。第4回の

と題す。第一回から、清水の出来がかかる。研究の日は月の、絶望に近づいて

いる。第一回から、清水の研究の中に吃る。希望を押してやうとする。

清水はアレナリ、十四時、梅の口三三九に移る。第4回の

と題す。第一回から、清水の出来がかかる。研究の日は月の、絶望に近づいて

いる。第一回から、清水の研究の中に吃る。希望を押してやうとする。

清水はアレナリ、十四時、梅の口三三九に移る。第4回の

と題す。第一回から、清水の出来がかかる。研究の日は月の、絶望に近づいて

いる。第一回から、清水の研究の中に吃る。希望を押してやうとする。

含めを自由主義者と左派のとては嫌いであるを得ないやうな気がする。今後色々な生徒たちの中には、資本主義社会であると、失望を以て社會はぶらうと、個人の結局まで一一従前のまゝに従事で、何處で奪取、自由で奪取國家は奉仕する一派の部分がいよいよ多くなることすらある。ナーヴィー教皇は悲しい教皇のものやアガンゲールの徹底した人間で有名だが、自由主義者の抵抗が世界の流水を堰止する力を持つことは私は信じない。その悲哀を察する。併し個人の今後の在り方とは

「初日人向と武令とは對子帽を折り、心を罩めて『同日手より声  
で書を續けて思つて、書を終て心を一まへたる』、『二人向ひ  
悲劇をつづきまつて、忘へては不幸の和々を恩み出させしに  
する』、『は力からうか、そして今日の我々の不幸が永遠に解決の  
道をもたらすものであるならば、薪水工事新一と考へてお必要ある  
事無し』——胸の底には墨で記して、薪水の方へ……初日今  
度こそは、——傳ふる事は燈油ゆゑつやう。小説を書きはじ  
思ふ。薪水二字、今日の人向が一番望んでゐる文字でござひでしかうか  
私は手紙をそれも書けず、薪水を書くためには、私自身、おもうと  
現実に詰めきつけ、這體して現実を超えてこす物なくては  
ならぬやうだ。けれど、(超越)と云ふても又一種の個人的解決  
の方であらうと、心で

後西川口文学者、之主方を見つけよと申す。我今之を  
二つ提出する。向後日本向洋時代から、素統者を主とし、  
曰小説言葉をもとめた。然る作者下、解説の事、舊小説  
打切、之理由の付とし共成り得る。當時の生主(

甲子の歌  
舞劍は風に吹き落し人を喜まし  
生む事一ノ幕人生也  
然る者へて芦矢も弓の如く説け共に之を不力の如き是れ  
古傳は弓觸れを不以逃避を喜んで居ましか



車中手の一句。ヤバジンも妻の手を引く墓参り。  
上野ホーリーでは娘子・鶴谷さんの出迎へる。  
出迎へて受けいもぐとしで写竹中と別れて新宿にて  
申述べて約一月30日でくつろぎ。小田急に乗り、鶴川へ。  
此地は三日は亘る。彌次郎の道中は終りを告げ  
名実共に東京の生活が飛逝り事はふつた次である。  
春日の故郷の風景は、草木立口。季節は桜は咲く  
僅の身心を惹きと呉れた事からう。

(雪融け札摩の人の事、恩ふと申況ないが)

最も愛する娘子の御手本は雪煙は共に送る御内緒  
御用の御手本も。僅て手紙の如く、  
帰省以来立ち向。娘子は今送るが、  
豪傑と。泣そ景気。美い君を。僕は幸福  
を感謝す。僕は来年は必ずハリーナシ自捕一人  
は努力して積みかねぬとい。ちび良友と古親族の如く  
生活の構想を考え、励む所はない  
二つ目、娘子より。又遣ませむ。僕女と三重の内  
で見出され。僅て御手本の中と融合して  
リーベン。西龍曰。透徹其筋の如く。  
僕が、只手も見出さず僕女でヘターハーフ  
と決意を以上。僕の生まじ道は煙草とそ  
轟いて了。酒場の山形川島。弓削弓難ふ人生  
の旅のよき道連れ。娘子曰く豈か跡を難ふ人生  
の旅す君よ。五重の内と追連れの如く。  
僅日を以て夢と語らず止まぬ。  
孰を知る鶴谷の山口を散策す。静かに。大手  
駅を出る。休暇のスタートである。

五月三十日(金)

向平穎子在鄉生活不?

四月十日(火)

昨夜は賀茂原を新潟祭り観劇

幕

丁中城倉久。

伊豆大島旅行滿載の打合と行ふ。  
竹中城倉久。

拳銃

特途

拳銃高木洋之助

旅

終電

祝你

拳銃

本朝八景

各舊 楊洋 雪車で轟轟

三島

横浜駅で渋谷

丁中山本(新加入)同行

春湘南を西下す。

軽井 大磯邊

周天日往來

三島より賀宣鉄函を修善手へ

手書

手中

温泉客の高年。零風氣日

旅を思ひ

徒歩で修善手温泉へ

桂川の磐流は左にせき

花も散る戸田街道

野口 佐保子八人。砂塵の沿河

行く。野口修善手へ午食。

愈々 徒歩の道唐山

目指す桂川の柳へ。途中高見天王街へ

心又は奥宮キヤニア湯を登る。此處は二か所

泉の援助あり故備竹屋。

高木の舟亭と

静博

酒奉詔津附近。眺望一氣山納

通稱昌吉と見度

點在焉三十二九十九成少

一同高見備

柳

五章以代。夕食を修善手。

一人旅の横浜商果化し即ち

人との山頂を目指す出發す。

金冠山の白い小道席を左に

戸田街道を6Kのペースで歩く。

於て此處高見

谷川山下り源以櫻の咲く山間の音

東流

なる。やがて戸田岸で金冠山の道合へ

左折して金冠熊谷中の小径上を

做念

眺望

層南して右戸田津の修善手

霜在如(鶴陽)

映え。遠州灘日全風毛弓

荷物をハガロ一、置き未だ一同、足日。食輕調で、勝てぬ  
二、小達磨ミ越季 東水は前方 約二km。織田小又口一。  
三、東に左不動川セテ、達磨山 屋根道 約三。首の通<sup>ス</sup>は金筋の筋方  
四、今日雪は包水た富士山の白色のヘルモ紫桂色に  
深き。静か。勝浦湾を抱きゆく。山頂。眺望更に佳<sup>ス</sup>  
一同、奮起<sup>ス</sup>。ペース2保<sup>ス</sup>。約三十分。

西伊豆、最高峰 達磨山頂<sup>ス</sup>遂<sup>ス</sup>辿りつく。

此迄多く高處の眺望の日本一<sup>ス</sup>事未だ正<sup>ス</sup>熱り、

悠<sup>ス</sup>且<sup>ス</sup>寂<sup>ス</sup>。起<sup>ス</sup>代<sup>ス</sup>。伊豆山<sup>ス</sup>コントラストして。

雨龍と雪和<sup>ス</sup>。海<sup>ス</sup>。遙<sup>ス</sup>。遼<sup>ス</sup>。今<sup>ス</sup>の晴<sup>ス</sup>も一度<sup>ス</sup>。

庵<sup>ス</sup>之可<sup>ス</sup>え。今<sup>ス</sup>洋上<sup>ス</sup>落<sup>ス</sup>。夕陽<sup>ス</sup>。

金色、麗<sup>ス</sup>。端<sup>ス</sup>通<sup>ス</sup>。一隊。風<sup>ス</sup>。吾<sup>ス</sup>船<sup>ス</sup>通<sup>ス</sup>。

西南、一段<sup>ス</sup>高<sup>ス</sup>。起<sup>ス</sup>代<sup>ス</sup>。天城<sup>ス</sup>主峰<sup>ス</sup>。万三郎方<sup>ス</sup>甲<sup>ス</sup>。

而<sup>ス</sup>先<sup>ス</sup>、伊豆の山々の度<sup>ス</sup>は二の起<sup>ス</sup>代<sup>ス</sup>テ<sup>ス</sup>。

不<sup>ス</sup>意<sup>ス</sup>色彩<sup>ス</sup>美<sup>ス</sup>也<sup>ス</sup>思<sup>ス</sup>。キヤウス<sup>ス</sup>納<sup>ス</sup>。

洋上<sup>ス</sup>向<sup>ス</sup>は鶴<sup>ス</sup>、熊<sup>ス</sup>、猪<sup>ス</sup>休<sup>ス</sup>身<sup>ス</sup>事<sup>ス</sup>。今<sup>ス</sup>名残<sup>ス</sup>。

惜<sup>ス</sup>んで下<sup>ス</sup>山<sup>ス</sup>。帰途<sup>ス</sup>猛烈<sup>ス</sup>暴<sup>ス</sup>。夕<sup>ス</sup>ニテ、一日<sup>ス</sup>内半<sup>ス</sup>。

心<sup>ス</sup>が<sup>ス</sup>、到<sup>ス</sup>着<sup>ス</sup>。三十四号<sup>ス</sup>、窓<sup>ス</sup>。夕<sup>ス</sup>モ<sup>ス</sup>中<sup>ス</sup>。

静<sup>ス</sup>御<sup>ス</sup>海岸<sup>ス</sup>御<sup>ス</sup>市<sup>ス</sup>の町<sup>ス</sup>。静<sup>ス</sup>御<sup>ス</sup>旅<sup>ス</sup>一<sup>ス</sup>沙<sup>ス</sup>。

カツテル味<sup>ス</sup>。夏<sup>ス</sup>の海<sup>ス</sup>。静<sup>ス</sup>不<sup>ス</sup>喜<sup>ス</sup>。道<sup>ス</sup>通<sup>ス</sup>。

旅<sup>ス</sup>夢<sup>ス</sup>者<sup>ス</sup>日<sup>ス</sup>強<sup>ス</sup>。人<sup>ス</sup>舟<sup>ス</sup>情<sup>ス</sup>三三<sup>ス</sup>。

感<sup>ス</sup>か<sup>ス</sup>。心<sup>ス</sup>か<sup>ス</sup>。

孤独<sup>ス</sup>旅<sup>ス</sup>。旅<sup>ス</sup>古<sup>ス</sup>。剣<sup>ス</sup>御<sup>ス</sup>手<sup>ス</sup>。是<sup>ス</sup>人<sup>ス</sup>情<sup>ス</sup>湛<sup>ス</sup>。

生<sup>ス</sup>の人<sup>ス</sup>遠<sup>ス</sup>。草<sup>ス</sup>宿<sup>ス</sup>新<sup>ス</sup>ア。静<sup>ス</sup>御<sup>ス</sup>身<sup>ス</sup>歩<sup>ス</sup>。

キラ<sup>ス</sup>。海岸<sup>ス</sup>町<sup>ス</sup>の町<sup>ス</sup>。一際<sup>ス</sup>輝<sup>ス</sup>。

流<sup>ス</sup>水<sup>ス</sup>弱<sup>ス</sup>一方<sup>ス</sup>。セン<sup>ス</sup>日<sup>ス</sup>。

感<sup>ス</sup>か<sup>ス</sup>。已<sup>ス</sup>古<sup>ス</sup>ものへ<sup>ス</sup>。嘗<sup>ス</sup>着<sup>ス</sup>も銀<sup>ス</sup>水<sup>ス</sup>。

四月十一日(水) 晴。此後は墨天、空には雨がかかる。

四〇木下の分野で足面をセーターでガード。朝食。

九時發の修善寺行バスに乗る。遠慮をす。

修善寺駅でバス下田前行に乗換する。

平旦の山間の眼

山中の中の町口を越す。南下する。

爲朝古賀人等の先人墓

之碑。二二に源氏五人今は言ひ知れぬ

故御の町に愛着真をゆきめらうか。バスは降りて

高野山街の軒ノ端で湯をやくぬけて古き続りと

詠う。八ヶ天城峠にかかる橋から、旅情一泊の春雨

が窓を仰ぐ。夜の雨、限界を摸る。山櫻をひそくと

満開である。山側の杉木立が煙つてゐる。バスが一ル角

ニ水から入らんとする。南伊豆の人物を詰り始めればバスは

コース中止となり。峰に差しかかる。

地の南伊豆に入道がかかる。そ二三に宿の人々の情

はさうかといふ。旅の心は歎かれて来る。

氣候風土共に良くなつた。

東北の世々の故郷木寺と未だ人々の町ノ音が細かい。

道は唯一の計外の連絡路として生き延びる。我が父の

胸には昔の人の夢を。山を駆けたり川を渡したり衛勤院

が水の口無理を取る事。湯を浴びて汗あふる湯ノ野の

里で小休止。二二伊豆の温泉町の中。一番山の湯の

零度気温が達する。二二一人旅の摸索商の幕次と

別れ水。宿泊、翌日は旅の平安を祈る。

五平尾人所、道端を穿孔して下田街道の左右の限界は  
展示。特有の隆起を持ち、山が馬鹿である。蓮池寺  
温泉は清流の畔に接する。4月11日木曜日  
晴れ。今後行程の予定へ入る。

奉雨一泊引立

斯ノーブルズ  
紅葉沢川の日光を訪ねる。1949年4月

程、中食の後、各个を呈つて下

用の町へ出る。

美す日本洋約締結、地了仙子へ至る。之は理在り

ナ音の性器崇拜の遺物。即ち男女性器の形どつて

像物と奉祀とを残存し、一般に供養堂等にて有名

竹中、正子等吉子大通、誠一郎、久彦不威、多

美預重のモ環日通、誠一郎、久彦不威、多

二、大前後、舊男女善子の要修等日相多木の如き

ヤニ下至るは職の教工共、強、反省、貞元

朱水有下田港ニ一望、納、涌岸の山、登る。黒船の

方現、太平の夢を報永九、下田の所人の警護、善子

夏風の士松捨の立體、天島の岩屋が白波、

あら泉でゆすす印象的

海捲り事、道佐、竹の乙女、何から平和、

氣を吸ひ、○舟板、中の船の美しさを感ずる

朱水は取もふほらず、南伊豆の人情のかもし出で良、て

もありう。也かく、唐人、お古の夢、是る。外人の

中がめ朱水恋に生え、苦しきのまゝ、二の丸、強、古の

現代の度、女、の夫婦、二、三の元へ、弱、女、の初命

之代表を余り考ひぬり、其の如く、眞元。

故に、今詣の人足、墓前の人々の煙、火鉢、火炉

のモ、一つのせむる者、其の命の人は、死、生、不、別、

朱水有、バスで遠古香温泉へ至る。此川、叔母、善人、

官、清流莊、在り、旅館、之處、名の通り

達流の畔に立て、泉、二、旅館、湯牛隨、豪華、

誇る、之處、駿、解熱、湯槽、被して、頭心不、

外、日春雨が降り、温泉のえ、湯、出る。

湯の音、達流、和、立、熱水の感、境、誇る、善

昨日、東伊豆、上りて、伊豆郡、根程、

四月十二日 木

打子度 玄快晴 红山 日落 落花 雨夏叶の色

下田湾 右口見之白浪海藻 の絶景に見立

来伊立障一の风光とぞ 曲弓海幸緑の岩の上に

桟橋打子度 玄白波 映え如く 海幸緑を至る

道路はテナリヘキ柳

御夷と申くバスの密かアス手

キヨリハタガリモミツ一ハ 洋妙手運轉手ハシケル

威心一3.0ういつか少時の絶景高水す 乗降する人々の

言葉にナニヤを知るも 旅ハア元持ハ不水子

河津港を過る頃 バスが一車曾我兄弟の父河津三郎

古事記語る 陰徳 五郎一之に生き来伊立の血之縁ぐ

立命十津の兄弟が辛金曲所り末 仇討之成通和合之京

事古傳仰るニとて身

洋上に浮く 大島 日手の屋く

風情也 車中の音々と招く ハスカレ 嘴上大島而く

喜く歌く 屋を引く 宿泊は旅水で仰く 咬口の天城越

と進て 天降の故もあらず オビガラハ 海幸ニテセイ

船取の町へ入る 手休止す

向も度立つ事多心不日北川を経て 片瀬海岸を廻り渡り

吾ノ弟一昌の如季熱川へ着く 歌口 海幸の下の1

十五分 相撲潮を重む也 見下し 海藻の山腹に 大田

道灌木群見しが方見え熱川湯泉、旅宿がだりと

並んで 打子度の熱情に説き写、町の右端の海岸の

若庵上で中食を終り じりくと煙、陽光はまだ春のもの

で白い、次第より海岸の風景はすかり南寂永て

名の上に極めつくり 小石を投げつけたりして遊ぶ

此處停車直前と云ひ運動を消散した五日

卯の中央、橋のタモトの工場を覗むる二娘

娘

の情態を讀み難得と覺へ。Tea room は寧ろ入る

事

と號する。潮風は紅潮とも號する。先有る。

五分か三十分で出でて20円であつたのは、二湯、露天風呂

居合三人で30円が、50円が、60円が、80円が、100円が、

水程

人々の善きが

詮諭の程

晴天後は春の空で

旅のよき

人情、機微は人々の善意をもつて

出でしもの

旅中は何ぞ悪人であらうか……。

人の世の寂寥とその身を縮

圉して旅の古天然色の

孤強の強き人々の絵像

古來より構成する所の

寒旅行

人々何ぞ悪人であらうか?

宿一泊は

弱水四三毛

旅に出で、消え入る心の灯はかまえておる

毎日の生活は人の世の和らぎで忘れかねぬ人々の旅の出合

も、花婿立つゝ

三の世の中の孤寂と是の人々

が、己卯心と和らぎよき旅の道遙水の動く合はせ

一熱い日を事

四時間、差が3バスを拾ひ吉田に向ふ

八幡野を経て吉田に着く、一碧湖への小屋に止ま

期停車と伊東と吉田駅未街の裡の事の俗化も

甚しくミケヤシ俗。遊蕩地化を如く叶の日が目が

十前

の口音をアラカルトに出でて漫遊竹中、心を寧め

漫遊をや

風俗のレッスタンを観る。

ナリス、如く都令の風俗と

田園の風俗と夫の確別

と兩者。漫入混和と許さない人々の善惡も

現れの日本、如何に相当離れて地の純器なる

田園風俗は清水なる

都令の發展と夫の如形の氣氛

俗化の如き

の思ふと直接の關係から

散失者、及ぶ地元の人々の心の内野を示すと

是の改善の度、知曉は、ヘルの向ふ、福井、三重野

解説承る。此處迄の阿寒の如き、終て大の自然環境  
は、本の手つをつとて置き、出来得水が車で近づく  
も、大自然そのものの環境を残して置き、  
是れ人間の自然の還水を保つ事にとては達である。

### 湖畔

出で 伊豆へ出る。

今治旅程中。

難用(やうとう)伊豆日、浅倉の駅に到着。此處の  
アリの紹介で日新泰(一斉を有する元の特徴の別荘)  
へ宿す。予約以上り快適不思議也。加之、浅倉の  
アリ、全部費用を清算にて下さるから、ノーリ  
トナリ。予算20余り、一級酒で湯上りの相手を寝下す。

丹前松(くつろぎ)旅の勞(り)を取らし。

氣も涼然と町を歩く。都會・學術・何處か、い  
遊来の巷を歩く。不快に至る事無く、立夏を度す。古橋  
うがヒニテ、まことに温泉ホールへ入る。福岡で●百米  
セローリング。④ 清楚甚しき水と、心地よき海水が  
勝定と、名産夏祭り。吉敷川打つ。明日の大島行  
のスケジールを打診。3.

### 四月十三日(晴時)

呂翁主財目を賣し、入浴と又眼も

連中得意のスロードランを始む。あやしく八時半出船の  
あけ湯(九)は向(今)の、南西。旅行團の連中と同船となり  
群馬、零雨氣と壤底と氣不懶快不<sup>リ</sup>。以  
來(の)ビルダリ及ホテルが快晴。●映写海原に  
群馬の美(ま)く、くつ至りと上方舟浮の出立當初の  
震震各が漸く、高(たか)め出立海上にロリニテ、船屋が  
眺めゆる。遠く天城の連峰が漠然と春めく  
の上にまだ少(すこ)少(すこ)錦と風景を浮かべる。相当ロリニテ  
未だも津軽海峡の諸島四人、此の日14度。

エルザレッヘンの氣にしてから、心地よきゆりかごに太平洋へ  
擇りてゐる。全く伊豆半島が港<sup>ハーバー</sup>、火口の中  
漂然<sup>ハリヤシ</sup>一多は、首<sup>ハサウエイ</sup>廻<sup>ハラウ</sup>すが早々、大島の植生<sup>ハラガニ</sup>  
眼鏡<sup>ハサク</sup>、波<sup>ハラス</sup>で中<sup>ハーフ</sup>天<sup>ハーフ</sup>の地島<sup>ハーフ</sup>一階車<sup>ハーフ</sup>と  
内野<sup>ハーフ</sup>三原山<sup>ハーフ</sup>草<sup>ハサウエイ</sup>調<sup>ハサウエイ</sup>鳥<sup>ハサウエイ</sup>と風<sup>ハラス</sup>一<sup>ハーフ</sup>案外  
福<sup>ハサウエイ</sup>能<sup>ハサウエイ</sup>色彩<sup>ハサウエイ</sup>と起<sup>ハサウエイ</sup>、高<sup>ハサウエイ</sup>色<sup>ハサウエイ</sup>即<sup>ハサウエイ</sup>不<sup>ハサウエイ</sup>文<sup>ハサウエイ</sup>一<sup>ハーフ</sup>  
船<sup>ハサウエイ</sup>日<sup>ハサウエイ</sup>是<sup>ハサウエイ</sup>用<sup>ハサウエイ</sup>語<sup>ハサウエイ</sup>目<sup>ハサウエイ</sup>指<sup>ハサウエイ</sup>一<sup>ハーフ</sup>你<sup>ハサウエイ</sup>走<sup>ハサウエイ</sup>今<sup>ハサウエイ</sup>

岩壁<sup>ハサウエイ</sup>不<sup>ハサウエイ</sup>遠<sup>ハサウエイ</sup>く近<sup>ハサウエイ</sup>づき来る<sup>ハサウエイ</sup>

アン<sup>ハサウエイ</sup>道<sup>ハサウエイ</sup>の姿<sup>ハサウエイ</sup>アリ<sup>ハサウエイ</sup>上<sup>ハサウエイ</sup>

「此<sup>ハサウエイ</sup>近<sup>ハサウエイ</sup>人<sup>ハサウエイ</sup>遠<sup>ハサウエイ</sup>は温<sup>ハサウエイ</sup>泉<sup>ハサウエイ</sup>の風情<sup>ハサウエイ</sup>多<sup>ハサウエイ</sup>景<sup>ハサウエイ</sup>色<sup>ハサウエイ</sup>也<sup>ハサウエイ</sup>

一<sup>ハーフ</sup>的<sup>ハサウエイ</sup>車<sup>ハサウエイ</sup>剝<sup>ハサウエイ</sup>青<sup>ハサウエイ</sup>、岩壁<sup>ハサウエイ</sup>でカドラ<sup>ハサウエイ</sup>に納<sup>ハサウエイ</sup>、泉<sup>ハサウエイ</sup>も一<sup>ハーフ</sup>元<sup>ハサウエイ</sup>に

三<sup>ハーフ</sup>原<sup>ハサウエイ</sup>山<sup>ハサウエイ</sup>目<sup>ハサウエイ</sup>指<sup>ハサウエイ</sup>を登<sup>ハサウエイ</sup>山<sup>ハサウエイ</sup>と用<sup>ハサウエイ</sup>焰<sup>ハサウエイ</sup>、昨夜<sup>ハサウエイ</sup>の休<sup>ハサウエイ</sup>養<sup>ハサウエイ</sup>と身心<sup>ハサウエイ</sup>

「疲<sup>ハサウエイ</sup>」一<sup>ハーフ</sup>行<sup>ハサウエイ</sup>は相<sup>ハサウエイ</sup>互<sup>ハサウエイ</sup>。ツキ<sup>ハサウエイ</sup>で多<sup>ハサウエイ</sup>坂<sup>ハサウエイ</sup>上<sup>ハサウエイ</sup>

一<sup>ハーフ</sup>合<sup>ハサウエイ</sup>目<sup>ハサウエイ</sup>再<sup>ハサウエイ</sup>登<sup>ハサウエイ</sup>、アシ<sup>ハサウエイ</sup>達<sup>ハサウエイ</sup>火<sup>ハサウエイ</sup>山<sup>ハサウエイ</sup>遊<sup>ハサウエイ</sup>でサ<sup>ハサウエイ</sup>ク入<sup>ハサウエイ</sup>

之<sup>ハサウエイ</sup>井<sup>ハサウエイ</sup>水<sup>ハサウエイ</sup>自<sup>ハサウエイ</sup>然<sup>ハサウエイ</sup>現<sup>ハサウエイ</sup>する如<sup>ハサウエイ</sup>此<sup>ハサウエイ</sup>一<sup>ハーフ</sup>元<sup>ハサウエイ</sup>湯<sup>ハサウエイ</sup>場<sup>ハサウエイ</sup>

是<sup>ハサウエイ</sup>上<sup>ハサウエイ</sup>、往<sup>ハサウエイ</sup>年<sup>ハサウエイ</sup>、富士<sup>ハサウエイ</sup>の裾野<sup>ハサウエイ</sup>の宿習<sup>ハサウエイ</sup>を因<sup>ハサウエイ</sup>る。

恰<sup>ハサウエイ</sup>毛<sup>ハサウエイ</sup>禪<sup>ハサウエイ</sup>の平<sup>ハサウエイ</sup>原<sup>ハサウエイ</sup>如<sup>ハサウエイ</sup>、而<sup>ハサウエイ</sup>側<sup>ハサウエイ</sup>切<sup>ハサウエイ</sup>立<sup>ハサウエイ</sup>る岩<sup>ハサウエイ</sup>有<sup>ハサウエイ</sup>日<sup>ハサウエイ</sup>が

云<sup>ハサウエイ</sup>く、當時<sup>ハサウエイ</sup>是<sup>ハサウエイ</sup>出<sup>ハサウエイ</sup>詔<sup>ハサウエイ</sup>、法<sup>ハサウエイ</sup>令<sup>ハサウエイ</sup>行<sup>ハサウエイ</sup>中<sup>ハサウエイ</sup>之<sup>ハサウエイ</sup>語<sup>ハサウエイ</sup>。

中<sup>ハサウエイ</sup>海<sup>ハサウエイ</sup>湯<sup>ハサウエイ</sup>場<sup>ハサウエイ</sup>牛乳<sup>ハサウエイ</sup>真<sup>ハサウエイ</sup>牛<sup>ハサウエイ</sup>、喝<sup>ハサウエイ</sup>龜<sup>ハサウエイ</sup>、再<sup>ハサウエイ</sup>步<sup>ハサウエイ</sup>、

漸<sup>ハサウエイ</sup>外<sup>ハサウエイ</sup>輪<sup>ハサウエイ</sup>山<sup>ハサウエイ</sup>一角<sup>ハサウエイ</sup>に立<sup>ハサウエイ</sup>り着<sup>ハサウエイ</sup>、見渡<sup>ハサウエイ</sup>せば本<sup>ハサウエイ</sup>年<sup>ハサウエイ</sup>二月<sup>ハサウエイ</sup>、

噴<sup>ハサウエイ</sup>火<sup>ハサウエイ</sup>流<sup>ハサウエイ</sup>出<sup>ハサウエイ</sup>る溶<sup>ハサウエイ</sup>岩<sup>ハサウエイ</sup>、黑<sup>ハサウエイ</sup>々<sup>ハサウエイ</sup>外<sup>ハサウエイ</sup>輪<sup>ハサウエイ</sup>、附近<sup>ハサウエイ</sup>至<sup>ハサウエイ</sup>る。

依然<sup>ハサウエイ</sup>活動<sup>ハサウエイ</sup>続<sup>ハサウエイ</sup>り<sup>ハサウエイ</sup>、火山<sup>ハサウエイ</sup>響<sup>ハサウエイ</sup>、附<sup>ハサウエイ</sup>附<sup>ハサウエイ</sup>、鳴<sup>ハサウエイ</sup>、渦<sup>ハサウエイ</sup>、恰<sup>ハサウエイ</sup>。

別<sup>ハサウエイ</sup>室<sup>ハサウエイ</sup>中<sup>ハサウエイ</sup>の空<sup>ハサウエイ</sup>巣<sup>ハサウエイ</sup>、爆<sup>ハサウエイ</sup>轟<sup>ハサウエイ</sup>、思<sup>ハサウエイ</sup>ひ<sup>ハサウエイ</sup>、如<sup>ハサウエイ</sup>此<sup>ハサウエイ</sup>、淺<sup>ハサウエイ</sup>倉<sup>ハサウエイ</sup>。

十三日<sup>ハサウエイ</sup>、金<sup>ハサウエイ</sup>曜<sup>ハサウエイ</sup>日<sup>ハサウエイ</sup>、方<sup>ハサウエイ</sup>下<sup>ハサウエイ</sup>吉<sup>ハサウエイ</sup>の予告<sup>ハサウエイ</sup>正<sup>ハサウエイ</sup>當<sup>ハサウエイ</sup>又<sup>ハサウエイ</sup>愉快<sup>ハサウエイ</sup>、

双眼鏡<sup>ハサウエイ</sup>通<sup>ハサウエイ</sup>、内<sup>ハサウエイ</sup>輪<sup>ハサウエイ</sup>、眺望<sup>ハサウエイ</sup>、苦<sup>ハサウエイ</sup>難<sup>ハサウエイ</sup>、又<sup>ハサウエイ</sup>歩<sup>ハサウエイ</sup>至<sup>ハサウエイ</sup>。

翌<sup>ハサウエイ</sup>神<sup>ハサウエイ</sup>大<sup>ハサウエイ</sup>茶<sup>ハサウエイ</sup>、至<sup>ハサウエイ</sup>、二<sup>ハーフ</sup>邊<sup>ハサウエイ</sup>、溶<sup>ハサウエイ</sup>岩<sup>ハサウエイ</sup>、特<sup>ハサウエイ</sup>に<sup>ハサウエイ</sup>流<sup>ハサウエイ</sup>出<sup>ハサウエイ</sup>甚<sup>ハサウエイ</sup>、

コンクリート壁<sup>ハサウエイ</sup>を<sup>ハサウエイ</sup>構<sup>ハサウエイ</sup>築<sup>ハサウエイ</sup>、乘<sup>ハサウエイ</sup>乗<sup>ハサウエイ</sup>予<sup>ハサウエイ</sup>立<sup>ハサウエイ</sup>、下<sup>ハサウエイ</sup>て<sup>ハサウエイ</sup>溶<sup>ハサウエイ</sup>岩<sup>ハサウエイ</sup>、

直<sup>ハサウエイ</sup>仰<sup>ハサウエイ</sup>見<sup>ハサウエイ</sup>裏<sup>ハサウエイ</sup>、噴<sup>ハサウエイ</sup>火<sup>ハサウエイ</sup>当<sup>ハサウエイ</sup>、苦<sup>ハサウエイ</sup>難<sup>ハサウエイ</sup>、情<sup>ハサウエイ</sup>景<sup>ハサウエイ</sup>が<sup>ハサウエイ</sup>個<sup>ハサウエイ</sup>性<sup>ハサウエイ</sup>。

黒々とした巨大な漁船の高橋、上を カラスが鳴きやめとつ  
飛来し、檍舟は 正に地獄の舟相なり。 それを見渡すと、  
握り飯を始まる。  
帰途の元舟へのコースを下る。 鳥販者の船で、約一時間半  
舟中で要らぬ事無く、猛烈な勢で下りにまかせて  
駆け下り、各舟やアシナギ達が目と回らして、驚く事なく脣骨  
は 三時半元舟のバス。 約半分前に向合つて、頂上より  
二三度、二の向約四十分、 石山の轍りホルの如く丸め  
を下つて誤認。 バスで 宝田港に着く。 出船内障、あれば  
の又は 駆け三時半、テーブルを多名残を惜しく、アシナギ達に  
別れを告げ、船内。 テラスでサガリを極め食せ其致る  
伊豆着直す。 時半 丁度 落日が伊豆の山々を撫でる如く  
鳴らす。 沈んでゆく更に天水が伸びて、船室の波涛まで  
一日の漫遊を閉ざす。 さてお早幸め。  
伊豆に上陸。 ピールを買込み、宿所にて。 伊豆  
入浴と 朝第一回遊。 日陽射したるに互に驚き合ふ。  
海城食堂で乾杯。 味正に百萬両ぶり  
心遣しのカレーライナーは、食欲を完らし。 何を成り立つら、又成  
り事立ふし。  
船内 各舟の思案は不詳。 転覆を恐  
議論百出。 日陽射したるに更に紅潮させて山本の  
カツリソウの牙城迫る。 今度のエリヤ昇天。 船内、正可  
に至りて漸く止む。 予にもどる時は、行中海食は風呂  
全く迷惑至極である。 である。 サンキスル、  
席に入り 清倉と私。 但、も落着目なし  
ガルソンドが出来下さい。 もう少し待て。 細介ヨリ  
娘へ。 懐中玉行三方に 一寸感心す。

四月十九日(2)

七時半起床入浴。庭のバルコニーで朝

大気を深呼吸。首朝。食慾も増えて事なし。

語学。健康不良。

四人の日陽射しで筋肉は

減倉。物語は及んで先生等。運は日傘當器者。如

四人、面目なし。

十時半伊东君が帰途につく

車中

種々語り合ふ。

又思案が毛季や財折家計見には興味あり。

合計四泊五日。壹千七〇〇円の豪華な旅行を了した

吾の夙暮旅四人で載三湘南電車は今も熱海を

乗り通車線を走らせて北上して北上して

「旅はよき哉」旅先の人々。車水!!

書 著三人。老いの人生。青年の運転手。吾の四人。度に志水未だいひめう。青年の運転手吾の四人。未だ善意の教父。吾の二小から的人生の運転手

手と並んで走るであらう。

書方達。平安と幸福を祈る所にはあくまでも、  
身をもつて優しく生きる。身をもつて豊かに人、  
嫁をもつて豊かに人、身をもつて豊かに人、

湯を飲む。伊豆の山々よ。湯柱たついやの町

の二に活きる人。身をもつて豊かに人、

日記帳。一頁を取てお擇りする。

風來作の心を詠むせんす!!

・ 12月

旅先で年少の人々の人生は確実に確実。姫子、千葉ふく、  
だから人生の旅に出でる。社会の人々。人生の  
歩みの歩み。如何有ゆる。

12月

旅先の旅の人の所似である。

四

四月二十日(金) 夢ゆる吉馬駅下の休暇は  
遂に終未を告ぐ。昨十九日は娘子と逗子を訪問。

途中鎌倉の町を少し見物する。十時帰宅。

本日は午前中荷造り弁送。又、旅装を整へ。新宿  
に出る。最初、東京の名残りを惜しき例で下二層  
至り。娘子と鎌倉駅へうつて過河。吉石山上時平。  
新宿、新山口で別業。娘子と又余日多く  
逗留する事。新山口。胸中をまこと懇意に如何せん。  
上野駅六時三十分急行北斗山口路。妻井目指す  
北上。

二十一日(土) 千石八時丁度十才持着。歌所の光にて  
休憩。夕食後。千石九时半帰宅。

五月七日(月) 晴。夢ゆる正口橋一束。我作ら  
手の手帳。駕籠道。春の新川は遙かに人も少く  
日を過ぐ。春の風情。月の昇り。月の昇り。月の昇り。

四月二十二日(日) 前八時半S.S.会。若山夏合説教  
" 二十三日(月) 地方選舉(町評所長) 小番詣内(夜)  
二十四日(火) 東京会議会(同会)

二十五日(水) 游く。多賀城。板橋(芝居成り)。  
廿六日(木) 駒込。歌舞伎。同竹河崎妹。

二十七日(金) S.S.教師会ミットエッセン  
" 二十八日(土) S.S.教師会ミットエッセン  
" 二十九日(日) 船山・昭三・久詠妙。聖歌隊員。

" 三十日(月) 三学年スタート二十八(丁申)小島。松月。高木  
五月二日(水) 船山・昭三・久詠妙。聖歌隊員(高木七時) 可会  
" 三日(木) 千石甲場起。吾一時对北大路屋井

節味試合（累試ノ上）取手 善四郎十全會

高見次一（小島招待）竹中と三人でレーリー夜

内野の入太平玲子女士は会員（平年二月女子太平）

西田金一在高見次一と面中ナラス（若見次交換同様会コート）

牛若三時四十度令奈を小樽（多行）一休庵夏人金森氏毛

川浦飲快食放談 竹中と三人で春宵の小樽の街

散策高又佐三哉”夜深空地 邦子婦

垣之栗超多宿泊

立川（三早相）以早ニ帰美 S.S.春2月7日

北大原始林一春月29日 奈良1月 ピニッケ

子供達と花火打リはねたる。唄つまリ

大口（S.S.）礼拜説教

牛若 指長歌迎萬新作物師歡迎親睦会の三歩の  
暖簾の料理調理 千キニライス（月屋）、ヤキトウ（細の  
スープ）（中村） ティアト（酒迎）と名男子教師の本番  
腕の活えを發揮と女子教師を驚かす。

連歌詩遊戲後若干の卒散会

以上が早大略である。毎日下り向野口軒中三十日的小森

のリーハー即富生節子せりの内野ひま、即ち昨日小森先の

書簡うまい、文中は僕の事記して有。お夕館室主

筆文章と讀んで處に多くて 大分細附で惚れをゆく

アエトイズコレラシで未セメタクシの心は相当怖い。小森の

手の点で貴様とは対して少柳少佐記載して字をしらべ

かわらくそつ帰り途詔告を置を行ひて前水はせよ。

僕の知る處で小森、小森今、箭子せりありの内野ひま

僅・態度日本語も字を書かず、箭墨の絵は伝承ば小森は

埠町也又、○、摩呂町也又、○、將意を示してゆう。

事以て三木は詠の外に手。

夕刻の吉井先生の講演、復興運動研究会の  
件より、個人信函内に、SSの具作の内返  
数会・日系基督教団内総務師の内返・早了の  
TBの内返・三明内に一旦アガスカラニヨヌ  
御禮摺り、在方。今後の活動は大好願  
持す。好漢吉井先生の復活を祈る事印スリ!!

五月十一日(金)

四 医学部三年生級コンペ於円山公園

午前十時半より痛飲開始。午前一清酒二升。七十  
此後直至三最喜不殆々。楠木コンペはクラシックス  
達喜四時 楠木園内ミネルバノリ  
松井勝日竹中小島勝井浅倉・井林計人ホリ  
ム部毛彌生の雲紫紅花の香漂浮遊宴の筵!!  
我が校の先人の植えし櫻花爛漫として  
逝く春の酒正ニ千金ふ

八時半解散

ミーチの太狂宴日終り也

五月十三日(日)

母の日 午前 子供会及度談会

盡矣母の愛を感謝す 赤カーネーション

故郷の老母を偲ぶ

母 ヒ 健在不水

ニナヒ便りも

幼い子供達の母の感謝の心

子供会の雰囲気

母の感謝の心

五月十八日(金)

娘子より来信有。即ち、来春のハリーテンと

仲間せふいからる。

もう一度考へては、

理由は、(1)物産向に他の援助口する点の反対。

(2)僕はまだ金剛山の金を貰ひ、点を書き来さる。

返信を以て、(1)は今日可不可も、(2)は捨てた男の金で

返信を以て、(1)は今日可不可も、

九時半

帰る

九時半

帰る

九時半

帰る

九時半

帰る

九時半

帰る

九時半

帰る

四

日 二 七 (月) 昨日大掃除で少しき清耗及

琴の所引春季樂元で夜は 独室で用ひ水を喫食令

後面影三四郎、手一肩の三字、全體3、琴所の和聲、  
の壁一、取得ル斯ム。跡外で吸血ヤ子多矣丁度!

今九漫日更ニ美一。 大人、構内有見る  
是色私中。 加テ、エルム有ニ一ノサニ。白雲

残レ平箱の運転日エギテノモアリ。

アカヤ並木の花性、角物持モアシス。

北大遊学、年々音楽。季節レモ。

失う道事口利ク娘子の未信ナ。

老の要旨と申す。周間又可レ傳承。要領未だモニテ

レトコト近丁未だ可マス。美ニ薦メ。被リ出下し

人ふ傳承口も耐えて申すニシテ。心ナリビニテ  
老貴方と失レ丁日耐え未だ一氣ナリ。

而ナ日私ノ傳承、貴方の蒙様ナリベシ。何ハ  
ナヒテ深く探る丸ナリ。

而ナ日私ノ傳承、貴方の蒙様ナリベシ。何ハ  
ナヒテ深く探る丸ナリ。

（三月三日）晴。生了病！ 到处找药吃，吃了药还是  
（今、漢口で嘔吐する。1日苦痛が止る）

（宿舎結婚式と京阪多目的振興会）

僅か十日間で又分業を奉る。男の家は皆と三人のものある

自嘲と呼ぶ。

精神萎弱の如き。

豪傑の如きが多し。御屋敷があるり手つかず。

（三月三日）晴。今快適不季節。斯くて地獄の

風物詩。生活も豊か。何ともも有り方である。

只、大自然の中呼吸する事多し。満足感。

自食の事非毒藥の生産者（不思議）

娘子の申次第、椅子を立つま

然一、志水やうな、私云々、努力のモチベーション

私云々良の如く。運人順天一壽の生命美滿の如く

解説

今日午前中、強烈した。放財の解説

書類作成。大事件起る。即ち、解説

當時月度を通じて、舊中止呼止の範囲

を定め行方不明者。医者印中度の溝地帶

口至之矣止れ。泥沼の中輪倒。新宿タクシード

ノ車の雨足の勝ち下垂脱水。浸水。情で。医化室

の部屋へ行き。水没の再三。雨四。やり難様不格恰

（四月見物不利益）

三時、到着で帰宅。未だ奇南先生の長唄を稽古  
且時迄。相当不易居る所。消耗甚しく。

夕食後、昨日は寝不足で、依然として不眠、不眠、  
精神不振。入浴九時。精神も一層回復。取

良好。次に其の翌日（四月五日）

（四月五日）

六月之風

早朝六時起床直取暖器中火。喜氣合主健  
茹取火者如是。即日移居者不外。

夫々の眞公大中小様より客席の肩に担ひ、果て天晴にて御用御飯を以て御坐候る所也。栗子

石狩の原野の一角に、一世紀前の汽車が行く  
金の匁の車の跡がある。

中口部而一枝，

子云之文，固以雄伟，而其行草，尤善。其字形，亦多奇古。

月形工場調査会（東洋子立の内閣）の取扱い

途中同工場，從漢口乘船北行三日。

自古以來，中國人對「孝」的尊崇，無以倫比。孝子傳世，孝女流芳，孝行可嘉，孝德可誇。

第一回　花の匂い　香の匂い　花の匂い　香の匂い

コンペトリ・ペーパー・ライター・ともおほきの地主

新之党、日党、天々立の意を元手す。  
孰中、蘇氏金之助、味山、福島、小笠の三人

良至一四五、

幸運兒。余承中。是也。幸運兒。是也。

の端飾  
形見  
月日  
著者  
年月  
アーバイト中止

答以銀而曰出迎之全尊之迎之亦是一日

家路之述。丁巳仲夏。年十九。

六月三日(日)

在日第一回の講義後今枝用枝の

場所は東町 河田若夫先 僕は今枝、教師

と二人。細川校長、洋多子、高井

山尾

山羊事沖等。

至氣鏡

正に要童地に日付二の日あり

夕食は雀の巣のものと志水

六月四日(火)

復而起向医院走る。暮会。

六月七日(木)

終の宿泊自殺の聖靈研究會の暮会。

六月八日(木)

在日十一年中、今度 東京国立第一病院

即相接厚病院長、主任の本学方三九科

教授柳林一博士、病院講師。

諸君の前途は正に輝々然るものなり。

到此北大

赴化をもう三十年、久間 醫學の駕異的の

發展變化を辿つておもえ。

諸君が社會的の地位

を固めかね二三十年後には又

の發展更進

なるであらう。且之諸君は近視眼的研究者

如強生等。

医学の社會運動の形を今跡

重視するが如く、財を尽しても

諸君が厚生省の文部の指導者を以て、良医師

が、その手を社會環境の發展向上に、あらわ

る全力を注ぐべし。

辛福の人生である。

諸君の内幸祐之所。

之若木

一世の同人、柳外神、大師所柳の後進。

是れ種々の要諦、心へて、の居て御す。

又壯勇哉！先づの内幸祐師健在の如

郎長、及病院長、皆能く

四時の汽車早帰。未だ其間お稽古。  
高砂り前進度合漸く中付歌隊一行を観劇。

東山夫人との一通手紙。余り面白く思ふ  
事多し。帰るえはもううぬ 芝居にて。

六月八日(金)

七月北海道医学会 研究会 日本医学教育  
研究会の一日(二二日)用花束。学長  
の御立派なやうい、傍聴者の方々多く  
仰る今日の一日体養育。初夏の陽光の  
絶好の書生の老々なり。殊に珍重。

娘子も重作。

現在の貴方の心中には如何の懼意か。今更  
一考有りと因る事。段々陰で御心印早福。

と萬能札をお氣持ひ若一の位。之を何時上りて  
私の在り難い解子。之が叶ひ得る元氣を一  
唯一言。甲上中止、又日今毛の貴方は付る所の  
豪情一放す甲上中止。又放日貴りず貴人。

貴方の如きの能文度合と氣ても決して和の文章といつも  
より。二年内も持つてはいたものを今更持てる氣はない  
事。勝手にお便りをきみうお送りの望み貴人  
がお元氣お旅か一月と。

教育研究所(日本側)の研究室に入所一月。  
娘子と云て漢語をきかぬ事無くやうにあり。性格で

實際の活用。昨年西の娘子の言語では可哀想である  
事かたれ。其處で西風歌。やり(一月の)  
生活。二つで自己、我信を以てゐる限り  
良き成長をあらわすう。

健康。幸福を祈り。

夕食之後

六月九日(土) 昨夕奈良來訪。三人で小林訪内、十時半迄駄々詠を種々面白し。结局リーベ論も二年未だ未て一まつから水樹論の域を出ま。

弟も娘子に通信を記す。

先ず二三の日常の経済報告に始り。彼女の就業を祝す。僕の勤務又社会福祉の信念はその使命、妻入のフライド大夫はたゞ。・ 僕のクリスチ！二三人でどうぞう？・ 僕は愛とや。

愛情多々ある道筋ふと僕にはる。・ 愛と愛され。唯そ水印に生れ。二年。僕の今後は愛と恩ふ自らのヨリは愛して下さる。・ 僕、ニウセイ生立家に之を大便命の愛するクヌン。ニコニ支へ氣。而ま永てゆき。

二の段、三人の内歎。余り飛躍と見ゆ。・ 僕の責任を負ふ。未だハジラーテン不可と詫す。合意の上。何を下水からそんでは飛躍と見ゆ。

午前中奈良会は出席。未だ。食事で例の三才のレーパー南下。ゲーランバ会が④アタマクル。別れて一人で名画館。宋元の道。大空は散愁。悲。體。小森。バス停宣物で今不理解。小路ガラく歩き沼田。タリーレンソーナ。沼田大手。一石買え。飲む。余りなくて醉う。明日之に限る！

六月十日(日)  
日曜朝後は小笠原還勤奈良の本校にて同礼拜。  
可念喜有足。謹啟御終矣。

礼辞後、小六サ一人新卒暁会に學園を渡る。

挂内春不徹在十三日、番組持越矣。

晝食後

小学校の運動会は見物。降雨と云ふ

後直席で時山駅長、蓮田夫人（一十九年六月）工事見  
と見物。降雨の申て元気と照り廻子は満足の

アイト成服矣。帰途 河野さんへ寄り、柳地主

ニ寄。リバトンの香り久々り。桂文・美達中之

才公キヤモリセヤリ怪談矣。トランジット

夜日移。降る春雨の音と雨音下り、立又久々。

トト彌、茶も下の降り。紅茶、トランジット後

春雨の音と博多の床に三月十二時過五つ。

六月十一日（月）依然として降而不止。

日本医学教育研究会開会式の日本水で休業

午石寺小母毛文泉人形店へお出かけ。

何と爲すもしく。宿子喬、兼て、在光寺。

余す一月で第二回医学工試験秉と。何と手づかず

往々無爲の日を送るのみ。

而の合宿を見ては庭に出で、花壇の間をぐるぐる

廻るのみ。

終日から登校とれるか……途中どうしてなるか？

夜は之又久しく（トランジット）を切る。最初初日木曜

本日は全然つそふく三千点沈んでエンド

スナボレオンは中尉（アーティスト）である。

六月十二日（火）登校。車中、春季会委員会のコンペ

件でもある。西村の前で寺田姉弟扣て、打開策を

練る。結局、全責任をもと事後收拾（当る）こと

この土曜日開催とする。この件ははじめからケチがつて

いることを自ら承知

婦人科 因病元の例の調子の講義。十時半。  
末年内のエル大学小児科主任教授ダローリ博士の  
体組の平衡度について 肉科と合同して講義致す。  
午後一時三十分で帰る。早度戰と闘く 徒歩、  
度々追撃され 早稻田遂に逃げ切る 勝つて 三で  
早度立同車と下り 次第と争ひ誤入する。

立候りバスで 高野松隆子と崇江と四人で  
松原庵 文来公庵へ行く。豊竹山城少様休演  
を此と 吉田文立郎始め 大夫、人形一座来りて  
仲々。庄巻。且堪能して。就中 豊姿女  
舞衣 三勝半七酒屋の段は見ものありま  
文立郎・老翁と猫・苦道・桂神子・姿口敬服も  
东日母より来信あり。予想通り昌彦兄の  
結婚式で予忙めりしが でも万事円滑に運ぶ  
理花ひも内満足難いことなら。

夏休みには早く帰れること

いつも本意では

これが親孝行の唯一 は歸省されば 虚勢を

張らず致一方もすまい

六月十五日(金) 札幌神社例祭 降雨

東洋大本格的受験態勢に入る

午前事 医学会出席

晴天

街を見た

札幌祭で相当不人出

日曜

午前

降雨水氣り

同様や人方

六月十六日(土)

小児科休講 眼科少し

午前は東日の豪華な

委員会コンペ用、山羊毛屠苏 摺殺保荒川

皮は毛保月居 内臓摘出網のスカウト入り

若狭屋 寿田良子師見合コンペ開かれる

六月十七日(日) 終日降雨頗り。

午石。終日十九日、萬金ハサ一計画之練る。

スカラ。之如レ

(○印各部委任者)

経営委任者 奥様子長光

アメリカ中古服部。通日婦人會長以下婦人會オーナー

粗貨品部 (墨砂糖、豆、茶、石鹼等他)

福島 (萬金) 中村、渡辺、荒川 (男)

食堂部 (八三三ル販売)

。細井 (萬金) 小野、河井、高橋子、山崎 (女)

会計。月居 (萬金) 及各部委任者。

会場係。細井、月居、福島。

宣伝係。平野、渡辺

何令急に決定シテ、今令準備出来ざりし  
之故、然れども金力にて、

六月十八日(月) 雨上り、利口、又サ一早帰。

前記の如き各スタッフシバ一鼎奉事。盡く可。

幸ひ、宣傳期日不<sup>可</sup>、人出<sup>可</sup>、好評<sup>可</sup>。

朴中、福島の活躍目観し。

苦隣雨<sup>可</sup>。中古品部。食堂肉口羽子。

客足<sup>可</sup>減<sup>可</sup>。

用古鳥汝<sup>可</sup>。(將<sup>可</sup>甜空押)

所持未<sup>可</sup>。小森、奈良。面々と例<sup>可</sup>二階<sup>可</sup>上

月居、福島、小生ヒ立人<sup>可</sup>空氣錶<sup>可</sup>標的<sup>可</sup>

射<sup>可</sup>且<sup>可</sup>賭<sup>可</sup>。奈良最悪の日不<sup>可</sup>。

二回行<sup>可</sup>。二〇〇円某<sup>可</sup>印<sup>可</sup>ワシ<sup>可</sup>ササギ<sup>可</sup>。

で墨氣<sup>可</sup>一升<sup>可</sup>。又米<sup>可</sup>が年<sup>可</sup>。又大<sup>可</sup>。

老水<sup>可</sup>。老水<sup>可</sup>。猪<sup>可</sup>アリ。又大<sup>可</sup>。

降雨<sup>可</sup>。三輪車<sup>可</sup>。馬車<sup>可</sup>。手車<sup>可</sup>。

エン<sup>可</sup>。馬車<sup>可</sup>。手車<sup>可</sup>。

並も夕食

七月半

吉野金例会

臨む

曾先生 僕の葬禮講演不外 王國ローリー キリスト教葬觀  
約十五分口豆を發題す。附記して本題に付く

諸細川牧師の講演者 沢下 デイスクレヨン二入

小森、奈良、例、三井、私會、上田師又伊勢一之  
経、三井、吉原、日居、前田、吉田、新井

未だ論議未定と向ひり 会合開く

江間も二の主張を窺ひたまも無し

久一、弓、話題多、別会あり、事の盛況

大

月廿二日(水) 予古寺登校

丸善、文寫書院、経玉

新水町 医学全科出席 C.P.C.A. (i.e. Clinical  
Pathological Conference) 各教授、診断

= 痘味を嘗人御教 来日教授、日氣の毒症患者  
アカモ、出逢者、意念、又病歴、記載、毛髪  
毛皮等の写真等、日本の教授根拠、沙士、ナット  
ル、ヤマハ、元老等、即ち病理所見の ECHINOCOCUS  
病、地酒造代有病、新水町人江知家如、孔文山の  
寄生虫出でる余り気を殺さず疾患が多矣。

帰途、相生姉妹二娘、娘女夫張り不思議な顔で  
立入る。活潑、其母在中立年もラゲットを

振るらし、(相手不思) つてお手合の手口  
快活で、健康で、喜ぶ。又ホーリンは良所  
在は遠く、唐弟う、能評、上京、時相互通  
つて、就職十一年、

滿月、夜五

二の夢の言動、又生活そのもの少しあリルが  
馬鹿のふう、新水町のせいで、各自金を重

金

大三

三十一

月日(土)試院準備の憂鬱已實之。葉理月  
調音之。通解之。半之。後實多之否?

今之登高以望遠者，皆以爲無窮也。

奉司泉。一〇〇内に本内一周名所觀覽べ不之缺也。  
重慶之南有山。丁力ニヤの花也數々。鈴蘭。香玉。天竺  
等也。之以大度矣。天月の氣候。年中。二般好。冬季  
節。多雨。夏。多旱。一處。半解。半之良。一誤。多之。

九井前一个叫平斧，大字，括场圆，内山圆，砌场圆，  
分之上，中岛圆，之分之九，第之三圆，即其完古。

是 gmp 水之必也 斯之謂也 不以實為名 謂之不忠

大學の攝肉事も莫比美一に思ひ、品物は良き。御飯は  
之の外が一也。御宿方、御旅行、在秦の如斯り。

夜は力尽き家で力尽く。奈良御跡同率ニモ  
歸支十一郎俄然下の冬の間日アツシは熱が入る

卷之三

七月三日 天平山夏陰甚熱。偶與友人同游。見山中多竹。因題之。

三、療養院の散策  
空は澄んで、山々が美い。  
相次某處で英之  
二月入院。  
病氣重い。第寒川原にゆく。

新嘉坡之海味  
三人之平价 又美味 所以

三月健夕日暮生矣。一  
四月！

七月六日(金) 久喜より登校。若山井林にて  
「頃々」の会見。天候の工合も良くて至る所  
様子。國立美術館にて古文書などを見て、失敗の  
因山へ行く。即ち竹中訪問五日。  
宿在先にて何やらどうもくわいと空氣。  
第三次詐陣日改道案を示す。大勢は私心不利。  
展開を早めよう。今夏の計画につき既存  
事実の裏見の猪巻を参考する。アスリートはお邊と毛を照り下す。  
宿泊の夜、若山、アスリートとお邊と毛を照り下す。  
夫婦の夫婦の夫婦の夫婦の夫婦の夫婦の夫  
妻、夫婦の夫婦の夫  
妻の夫  
試験をまつた。二つ揃合口溶一へ状況直下。病理的も  
身を入れて勉強を之意欲を擣つて未だ  
竹中と二人で車や水やと忙べる。若者を避けて  
此酒通へ逃げて来るの何も暑さを求めて上京するつもりで  
よい。只向ひ若者とくわい。娘の説解と  
昌兄。結婚。内廷ひき。母・叔父よりも帰る未だ。昌  
幸の手紙にて。——國立美術館  
九月の試験を指名で諒しておこう。歸省と東京  
9都会の感覚を離れて来るのを重ねておこう  
三三事小。娘子も今そろそろ幼い。  
出来の如き勉強。——又歎歌の小説——  
處で大生がうわゆる味の一つの大成績を追ふ。九  
世竟味のうちまく。あれはマイナスに不満。——へて  
手てを取つて貰ふ。今そろそろもう少し成績も下り  
話とう。——と今つて是れ。娘も一つ男だ。不満  
三人で、菓子を猫食つ。伊豆の恩典出で止む。  
少雨の降り——三の申ハスで帰る。丁度奇巧。

七月七日(土) 七夕祭り。

全く快適な気候で、今日の雨も又風情あり。

第一季期最終講義、出席す。

花火。昨日未高集中の福田先生訪問可。

御主人上京中で少舟様一人、のろくとお話をうけた見の件を印出可。二日前、如き待遇の望めぬが、どうぞお寄り下さい。ヒツクお詫び。結局、

参上する事可也。如何乎旅日記は手のや。

未ち雨の中を駆け至り、ニ水又昨日未割集中

の丁女史と会見可。西村に至りアイスクリム等と

潤い欠かず亭のKの意向を佑へる。その辺にてテラツ

老練手写の自負見可。ザヤキ、地ふし

理恵の勝之丁女史、口邊に微笑みてた。

今度は、我と努力可。暮は眼光乍らく

して桜え結婚、血管は赤赤と。我一言一句

又我眼毛射點如く顎視可。

喧嘩、女性名の斯多強至もるか！

翻て男性のもの、老舗に更有、冒頭え、會見

四十五分ほど苟々と別れ。

夜日、茶の間で御如くホカ一俱衆部例会

手あ。浮き沈め不なし、老練手写イボリ

七月八日(日) 胡ち着々と手に持つて

(中止用)  
S.S. 礼拜八時、設故“花之謹”

礼拜後尺作多就博之佑へ

午石日、日帰多後花の日礼拜

疗養所日程、移転新園

七月七日(土) 七夕祭り

金々快適な気候で、今日も雨も又風情あり。

第一季期最終講義會出席す。

花火、昨日未考案中の福田先生訪問す。

御主人上京中で小舟様一人のところとお話をうけ  
た見の件を切出可。二月前、御主人待遇の望めふ  
が、どうぞお寄り下さい。どうお詫び、結局

参上する事は可。如何の旅日記か。也。

花火雨の中を限口至り。二水又昨日未割烹中

の丁女史と会見す。

西附に至りアメルムセのどと

老練手写の自負見す。

ザヤギの地ふし

理性の勝つて丁女史

口邊に微笑み三十六

の感想を教えんと努力す。

耳に眼光

とて釋え、結婚、血管の弊赤ら。

眼光

又我眼を射る如く顎現す。

喧嘩、女性の斯多強至るが。

難子男性的もの老狯に乏有の寶元、会見

四十五合の如き別れ。

六月八日(日) 胡弓番手迎

快晴の中、聖日迎

中華正礼拜入門、禮故花道

礼作後尺の作多就懇意佑

午石日日帰多後花道礼拜

花火公天施設、訪内事

疗養所に至り物語礼拜、新國

七月十一日(水)

夜未の降雪  
だりの天気です。庭の赤バラが美い。  
霞草は満開。夏菊ももう少しで開くところ。  
雨に打たれ、落葉一いつ變へ。

二の夏休みへ帰らる、と決心へと途端に  
胸の中を去る。思ひに懐かしく、  
娘子の優しい微笑みの声は、波紋印を自身へと  
残す。あつたうか、我家の氣温不生活。

エルギー挽回をひきみる。

もうすぐ考へ直して送そぞろの日。

社会へ出でかねは二度と二の様子生活は出来ぬ。

最後の恩宗時代とて、又、從来

甘くは進まないのを。

少し、娘口に笑はる。娘子と家へゆるをうな  
ぎ。娘は勤勉といふ。強く力いたる。

二人の僕らも医者とて世界立つと望め三以上  
良き医者になりたい。どう考へ、

即ち、

二人の單純子元狩は小三の不思議

七月十三日(金)

この辺は龍城生活は終始一三九

天下の情勢は首肯不得ふ。僅かに外業者。

新聞を通じて、推移を知る。

朝鮮動乱の停戦合意は世界の耳目を集中

させ、威り、中央、国連両軍の首脳の

善意多き解説を希望する。

遂に乞うかね。昨日、行中訪問の時一寸語り出で

野球をやりに内山へ赴く。十三時ごろのバスで鳥居前  
下車。仲々内山同情之意はない。

ニッ涼一は暑中休暇でもある。全く涼一。

すくいの緑の葉が風が内山から吹き下りて

坂下グラードは絶好のコンディションなり。

観光バス乗る。次々とドライブして名の来る、風景。  
でも、久しぶり。打つては走り、走りで打つては走り、  
車乗

のグランドと駆け廻る。消耗する。

公園入口の喫茶店でサイダーなどのども潤す。

この辺の涼一は、丁度、東京から軽井沢へも  
避暑に行つてやうな気分にする。喫茶店、窓より見える

白樺の木、岡山の佐田盆地の風景、そして山の緑、  
歩く人の姿、等、そぞ我ながらして、と古の中に分

不思議、都会、俗塵からかけ離れている。

凌倉が東京から帰省して来る学生の話と、本当に

萬葉を環境できよとおつまみ全く萬葉を生活で

す。竹中、下宿口至り。北酒造の地圖を

拵牛又へ立ち馳せる。途中全く心の氣ふたり

なし。水でも秋葉が氣に立と見えて立時平二日

夫々家路を引揚ねて三日殊勝である。

夜は甚しそうブリッジ老帝ふアレイで最

も泣き止む。平均十三・七日。手形く。拳銃代  
の面白更にふし

今日日遅い午前中、二つ内り。決闘あり

明日終日九二日。翌日更にふ止められ  
とまで取られ。

楊元はやるへ

七月十九日(木) 晴

次二回學士試験施行第二日 菓理學

先十六日(月)より細吉学は先ず ヴィルスの山に当る。

七点確実(最高)と云つて 本年大量八十人不合格  
と云ふ人物を射たる何を云々 本日、菓理學は主任眞崎  
教授にて 大物甲の人物 全力を注ぎ三回學課準備一  
連中も予定通り 結果如何? 開始中は 讀説 滅渴湯は  
必狂言空氣が漲り、立刻十時半 先手 時間保。助手  
入場、統べ監督・助手五人 最名は眞崎主任教授入場  
1/2 大蓋<sup>カバ</sup> 四回中 全部手を付 一一十五 二十五  
三月二十日 四月十五 日始局大上点(最高)見程り 確保!

結果到着は十月、審査を待つのみ。

菓子病院へ赴く 途中、行甲山 再農場<sup>アメノ</sup>一ホグラ並木  
を散策し 又、ワクワク病院前で 女子学生アルムイトの室内鳥販  
や毛玉販賣し 更に歌詞<sup>ソング</sup>ニシテアラカル

北見の街 依然雲煙更化し 牧場<sup>ルビ</sup>はルビ下田のウニ<sup>ウニ</sup>  
二人並側の本堂の方で施養<sup>シヤウ</sup>する 薬<sup>ヤク</sup>母<sup>モチ</sup>も  
大変堅苦しく居永<sup>ヨリ</sup>し 和<sup>ハ</sup>シテ不思議<sup>スノリ</sup>多<sup>タタキ</sup>

帰途行中、下高<sup>カミ</sup>至る 八月一日以降<sup>シタ</sup>スシール<sup>ス</sup>礼<sup>セイ</sup>協<sup>シテ</sup>  
モ、宿泊<sup>シテ</sup>二人のスナックの目的<sup>シテ</sup>相違<sup>シテ</sup>有<sup>リ</sup>云<sup>フ</sup>  
一元、二千円の教諭<sup>シテ</sup>送<sup>ス</sup>参考<sup>シテ</sup>可<sup>リ</sup>云<sup>フ</sup>

石川、下高<sup>カミ</sup>在り 人<sup>ハ</sup>不<sup>シ</sup>常江<sup>シマエ</sup>久留<sup>シテ</sup>居<sup>リ</sup>、風呂<sup>ヲ</sup>て  
着<sup>ス</sup>二着<sup>ツ</sup>入り、寝<sup>リ</sup>早目<sup>ハ</sup>仰<sup>レ</sup>ぐ

城<sup>シ</sup>、喀<sup>ハ</sup>血<sup>ム</sup> 大汗<sup>ハ</sup>下<sup>リ</sup> 大<sup>ハ</sup>体力<sup>ハ</sup>絶<sup>ヒ</sup>向

王持<sup>モ</sup>ものあり、自重<sup>シテ</sup>学<sup>ル</sup>。

二二三事<sup>ハ</sup>集<sup>ヘ</sup>て被倒<sup>ス</sup>、報<sup>シ</sup>日<sup>ハ</sup>試験中<sup>ハ</sup>猶<sup>モ</sup>更<sup>ハ</sup>悲報<sup>ス</sup>、  
好<sup>ハ</sup>腹<sup>モ</sup> 四百助<sup>シ</sup>城<sup>シ</sup>、諱<sup>シ</sup>再起<sup>シ</sup>所<sup>ス</sup>。

七月二十日 (土) 病理学(武田試験)自信あり。

夜 小森先生 大コンバーストーナをやる

七月二十二日 夜 登山 一九五一年度北海道内大旅行

途につく 第一次出発

即 十勝・日高國

襟裳岬(道立公園)を経てアホイ岳登山

帰途 支笏湖 北大峠で泊リヨット練習

七月二十八日 出 三甲先生

懇親会費 200円

八月一日 (水) 朝登山 第二次出発

同行行中正人

即 北上 旭川を経て士別毛里天塩川を遡河

名寄毛里 興部毛里オホーツク海岸に下り

遠程にて家庭医学接訪内 徳福田牧場に至り

更に南下し北見毛里洞爺毛里モロ貝塚見学

休養後舟で知床半島に上りウトロに渡り

知床半島、樺太トラウスに至り 国境の町の緊迫

せき情勢を観察 南下 標津を経て釧路に出て

帰札

八月十二日 着札

経費 300円也

此處の経費 500円で今夏大旅行の幕を閉ず

八月十六日 返 連日夏季医学接觸校準備

八月十九日(日)十六日より四日間夏季医学接觸校

八月二十日(火) 九月の試験準備を開始

九月五日(水)病理学(安保試験)自信なし

"七月 日本衛生学(井上) "あり

九月九日(金) 金剛陽の節句

誤別コンバーストーナを於持毛

一〇日土 箕輪七三。 隆音の途は就く

一一日月一一五。 上空着

帰札

九月二十日(西)

帝者以東、毎日の如く降雨は二日至下水で  
憂鬱不思議な事、久方より支御の邊  
一月の中で、多き如きは、たゞ三日六月二日  
消え、一氣に換回も余り事の如き。

娘子二の四月以東の間、腸風等の極度の  
怖れ、單身成程、行至るに強められ、  
心力も無事、了令、女性の如きは、

心地悪く生れり。女は、公室の事易く  
心えき節へて、其を指揮するに及ばず。

望月已川花、互に理解、合意努力する  
は、心す。愛意と強、事と三分のものと握るに至る。

廿四日、前後十二時～三時  
二の日、蘇る七月の学士院接（葉理、細目）  
病理、合格通知、祝宴を張る

九月二十二日 大程度

廿四日、あらぬ、不思議、朝八時半

向著師見学、七八温早、心事  
志平足、六郎兄、娘子の四人、相應厚の丘陵の中  
二天子のうちの環境が、身に付く事ない。

北面通は叶へず、其間、御山の山道の又  
氣分和順、故即ち、氣分も清潔も  
二人同行車、三人乃は業（いわく）の外、？？？我身

の五年、口吐小、七尺の達高を差す。  
國家の著師を憲古の不都知の帝國元年、十二月、  
何事（何事）の感謝を一日、記温早、同日、  
云々、御文、十一月、二十九日、  
御文、十一月、二十九日、

九月二十四日(秋分の日)

昨日引続ミ快晴。娘子と逗子へゆく。家中在宅。  
叔母もすつかり元氣で安心した。兼て一尺二三度  
タイトルを目標として猛練中の健治と将棋を指す。  
初盤戦より中張手戦法が押して、一氣に終盤へ持つ  
少しそのまま押し切る。早々に健治投了し、再度タイトル  
は我手にかかる存ま。スチヤキの地主ですつかりくつろ  
じよじやまう話題に名残りを惜しへと土村のバスで帰る。

帰省中の最悪を経て一日を送る。

九月二十九日(金) 小岩は中とも竹中不在。徳倉帰京と  
由不見。訪れ。幸ひ会ふ。札幌の特報を入手す。

試験券表の件。ナニセズモ樂い。

水もピカドリーヒヂ。娘子と会おヘイヴ。結婚してしま

親。仲々の傑作。

本年度洋画ベストワンホルム。結婚してしま  
娘子と町田へ晴る。

九月二十七日(木) 娘子。

東京興ふ水と降雨あり。要予。

銀座不二やで竹中・機倉と会ふ。

銀座にて後、スバル庵に赴く。今西洋三と申が出て  
シラバヘルスラッシュと親。その内、日比谷公園

官城前市場 散歩す。帰途、新川町の上野の老

旅館 大歡迎と。大歓喜。

一同ハイヤーで引立ぐ。終電を逃し、渋谷を水  
へゆく。

九月二十八日(金) セントラルリリー。名古屋一松川。

一人一大半残り是日。

夕刻帰る。

九月三十日。原町にて同好会コートグラウンドを訪る。

十月一日(日)月ノリ有。調子出。

十月一日(日)大藏祭礼。

金 説別ノリ 三週向。花御生活の因縁出と  
沙先。鶴も別ノリ。

娘子。翁石の夜の語り合ひ。感情無量。

熟王接吻。誤別の心代え。

十月一日(日)朝九時三十分钟。上空筈。

同行。博倉。行。

平館温泉小憩。平館山登山。

湯の川温泉。

四日。朝六時十分。札幌着。

五一。昨日。午後五時。故様。駒鹿講義。出席し

以て。第二学期。午後一時。!!

七日。度。拵え。二二八。(解。力士)

对。高大戰。野球。訊合。(田山球場)

一〇日。月附。一。鈎口中央。(月居)

一三日(山) 故念。竹。利久。中至。南業。

一日。木。田代。川山姫。二年。故念。旧家。新。

二日。金。病院用院三年。故念。休情。

三日。別。温泉。北大介院。一。同行。博倉。

四日。新。井林。九立人。例。之。無執正立人男。

登別温泉。秋の湯浴。行。兩落札三元。

水落木。東洋。浴場。設備。唔然。音。

湯呑量。温湯。種類。等。二。日本。有之。

又。大正。二。日。二。感歎了。

十二月三十一日 午后七時記す

余は毎年一九五一年を終えます。

心は感傷無量である。社会的には次第に十大ニース  
エヌ如く、日本の行く手の困難はと最高を事實と  
思ふ。然し、その中にはあるほんとはほのかな  
平和への希望がある。

何と云つてモ一九五一年は終つてゆく。そして  
新しく一九五二年の構想は成つた！

生きてる。遅い。信じて……。

一九五一年十二月三日「事起版」(N.H.K)より

西経亜競技大会 (印度ニーナリ)

マカナヤ元師解任 (東京・ワシントン)

櫻木町事件 (横浜)

眞理皇室褒揚 (東京)

追放解除 (金口)

民間航空西用 (東京・福井・札幌)

電力危機スイ (大阪)

台風ルイスの災害 (西日本)

講和條約締結 (サンフランシスコ)

社会党分裂 (東京)

講和・日米安保兩條約固會通過 (東京)

# 一九五二年度構想

元旦記

- キリスト者としてのヒューマンティード根柢とする医学者としての学生生活の最高学年を眞剣に学び且つ片寄らざるバランスナリティと養成すること。
- 許された者娘子とのリバーウ 最後一年をペターハウス心から人の間たゞぐ努力する事。

右の構想に基き左記予定と画つ

1952  
一月上旬  
一月下旬  
二月上旬  
三月下旬

帰郷休養  
勉学・スキースケート開始

見学旅行且休養

故園探訪

最終学期勉学 公的生活至此  
且 健康のため 三次 登山 等

娘子永札予定  
帰省 実習の傍 夏季スケーツ  
及 リンパ病院決定

最終学期勉学終仕上り

帰省 平業試験準備  
平業評詧

ハイテイン準備 及平業式  
ハイテイン

1953

三月上旬  
三月中旬  
三月下旬  
三月上旬  
三月二十二月上旬  
三月二十二月中旬  
三月二十二月下旬  
三月上旬



一月三十日(金)  
又朝之の誤別の時  
来石。何回となく弾り  
這一石とは古へ恐れ一回も  
二人で石を並びて到着し観劇の宵。  
夜の更けまで花火語り合石二人の喧嘩大連。  
10 陽気を浴びて馬の廻り冬の庭

和らか

和らか

和らか

千葉と今石黙って歩く寒夜の道。  
然し又駄一の別小の時が来る。  
又逢石君と名前と辛水井  
惠子姉と三人で新宿へ出る。そして東京の街  
灯のともる坂上壁歌へ向ふ  
「中二人で一路北上する満月

一月二十七日(日)  
連絡船。暴風雪のため五航。一日遅れて  
今日吉田四時半札幌着。雪のれんの  
又之も始ま。雪の生活。買付する。

三字月予定表  
一月二十八日(月)登校開始  
二月二日(木)北大開學記念日休日  
二月三日(金)スキー遠足  
二月四日(土)サッカーフィールドスタート。シンペニ  
春香山第一・第二行前八時半。  
午後六時花火大会  
午後六時花火大会

於琴似神社霊所

「月十一日(月)二十九日まで三月、見学旅行涉外事務  
完了

## 奥秩父主脈縱走計画表

### 1. 道順:

不大幅: 立川 — 氷川 — 日原 — 七ヶ石山 — 雲取山

— 北天, タル — 將監峠 — 雲取山 — 雁坂峠 — 甲武信岳

国師岳 — 金峰山 — 金山 — 増富温泉 — 比志 — 蕉崎

— 八王子

口. 詳細: 立川 — (青梅線) — 氷川 — 日原 — 云取山

④ 日原 — 巴・戸沢遊行 — 鞍の谷 — 巴・戸大谷

七ヶ石山 — (尾根) — 雲取山 — 雲取小屋(泊)

⑥ 口-ス 日原川遊行 — 巴・戸 — 遊り — 大ダム — 小屋

小屋 — 雲取山 — 猿平 — 北天, タル — 飛竜山 — 大タル

— 竜喰山 — 將監峠 — 唐松眉山 — 黒櫻山 — 雲取山 —

立取小屋(泊) — 雁坂峠 — 蕉山 — 古利山 — 水晶山 — 雁坂峠

— 雁坂嶺 — 破不山 — 木賊山 — 甲武信小屋(泊)

— 甲武信岳 — 富士見 — 桦 — 国師岳 — 朝日岳 — 金峰山

大日小屋 — 富士見平 — 里官 — 金山峠 — 金山 — 増富温泉

— 比志 — 八ヶ岳 — 蕉崎 — (中央嶺) — 八王子 (泊)

### 2. 日数、4泊5日

八王子 / 50円

3. 料費 立川 - 氷川(50円), 比志 - 蕉崎(75円), 蕉崎 - 雲取山(50円)

雲取小屋, 雲取小屋(無人), 甲武信小屋, 各 100円

増富温泉(340円) 200円 総計 775.00

### 4. 携行品: 主食2升 副食(罐詰類), 毛布 煙管用具 加油